

2024年度

エヌアイイー

愛媛県NIE実践報告書



Newspaper in Education

教育に新聞を

愛媛県NIE推進協議会

目 次

◆実践報告

◇自ら考え、豊かに表現する児童の育成 ～新聞に触れ、新聞から学ぶ活動を通して～ 四国中央市立北小学校	2
◇確かな読解力を育てる授業の在り方 ～国語科における場の設定と学習指導の工夫～ 久万高原町立父二峰小学校	6
◇読みたい！知りたい！伝えたい！がっぱいのN I E ～確かで豊かな語彙力、読解力、表現力の育成を目指して～ 鬼北町立泉小学校	10
◇友達や家庭、地域との豊かなつながりを通して、ともに学び合う子どもの育成 松山市立小野小学校	14
◇持続可能なN I Eを目指して 愛媛大学教育学部附属小学校	18
◇生徒の表現力を伸ばすとともに、様々な社会的事象に対する興味・関心を高めるN I E活動の実践 今治市立桜井中学校	22
◇自ら学び、考えを深め、豊かに表現する生徒の育成 松山市立旭中学校	26
◇社会への関心を高め、自分の考えを自分の言葉で語ることのできる生徒の育成 ～新聞に親しみ、読み取り、視野を広げる～ 松野町立松野中学校	30
◇「N I E活動を通して行う生徒と地域の未来づくり」 ～読み取る力・判断する力・表現する力・ふるさとを愛する思いの育成を目指して～ 松山市立久谷中学校	34
◇持続可能な社会の実現に貢献する実践者の育成に向けたN I Eの推進 愛媛大学教育学部附属中学校	38
◇新聞を用いた総合的な学習の時間の授業実践 ～小論文指導につなげる新聞活用～ 愛光中学・高等学校	42
◇思考力・判断力・表現力を育む新聞を活用した活動実践 愛媛県立新居浜西高等学校	46
◇自らの力で、自らの未来を切り拓く生徒の育成 ～持続可能なN I Eを通して～ 愛媛県立伊予高等学校	50
◇委員名簿	54

※2024年度愛媛県NIE実践報告書は、
右記ホームページからもご覧いただけます。



愛媛県NIE推進協議会
ホームページ

自ら考え、豊かに表現する児童の育成

～新聞に触れ、新聞から学ぶ活動を通して～

四国中央市立北小学校／教諭 亀窟 千春

1 はじめに

本校は、四国中央市の北西に位置する全校児童103名の小規模校である。学校の教育目標「進んで学び、心豊かで、たくましく生きる北小の子どもを育てる」の下、地域と学校が一体となって様々な教育活動を行っている。学習における望ましい児童像を「すじ道を立てて考える子」とし、確かな学力の定着と向上を目指した「分かる・楽しい」授業の研究を進めている。

本校の児童は、素直で落ち着いており、やるべきことに真面目に取り組んだり、粘り強く向き合ったりできる児童が多い。しかし、自主的な家庭学習や読書の習慣はあまり身に付いておらず、読解力に課題がある。多くの家庭では新聞を購読しておらず、新聞を読まない、読んだことがない児童が多い。様々な情報はインターネットやテレビから得ることがほとんどで、普段からあまり新聞に触れる機会がないことや、長文を読むことに抵抗感が見られることなどから、児童にとって新聞はあまり身近なものとは言えない。

2 研究のねらい

「自ら考え、豊かに表現する児童の育成 ～新聞に触れ、新聞から学ぶ活動を通して～」

3 研究の内容

N I E研究の初年度となる今年は、研究の内容を以下の3点とした。

- 新聞に触れたり読んだりする活動を通して、新聞に関心を持ち、新聞を身近なものと感じられるようにする。
- 教育活動において新聞を効果的に活用できる場面を見極め、カリキュラムに位置付ける。各教科や単元において児童に身に付けさせたい力を明確にし、新聞を活用することで学習効果が上がる場面で、新聞を取り入れた授業づくりを行う。
- 学習したことや自分の経験、考えや思いを発信する新聞づくりを通して、表現力の向上を図る。各教科の学習活動に新聞づくりを取り入れることで、情報発信に必要な力を身に付ける。

4 実践事例

(1) 新聞を身近に感じられる環境づくり

新聞コーナーを設置し、N I Eで購読した子供向けの新聞は、掲示委員会の児童が毎朝新聞ラックに掛け替えて、自由に閲覧できるようにした。設置場所を高学年の教室前廊下とすることで、朝読書や休み時間などに児童が気軽に手に取り、読んでいる姿が見られた。

(2) 新聞を活用する

1年 学級活動「しんぶんすたあと」

これまであまり新聞に触れる機会がなく、新聞を読んだことのない1年生に、初めての新聞との出会いの場をつくった。たくさんの子供新聞の中から、写真や絵に着目しながら気になる記事を見付け、読んでみた。ルビを手掛かりにして読みながら知っている言葉を探し、いろいろな言葉に触れていた。写真や言葉から自分が知っていることを伝えたり、友達の言葉から内容を想像したりする姿が見られ、読むだけでなく、自然に伝え合う活動へと広がっていた。



【新聞を読む様子】

1年 国語科「かたかなのかたち」

形の似ている片仮名や平仮名、間違いやすい「ツ」と「シ」などについて学習した後、学習した片仮名を含む言葉を新聞から探し、抜き出した。ノートに書き写すときには、学習したポイントを意識しながら書くことで、片仮名の正しい形を意識させた。子供新聞を使うことで、片仮名の言葉を探すだけでなく、文章にも興味を持ち、記事を読んでみようとする児童もいた。最後に見付けた言葉を全体で共有することで、たくさん言葉に触れ、語彙力を高めることができた。



【片仮名を抜き出す様子】

2年 体育科「レジボールをなげよう」

新聞紙とナイロン袋で作ったレジボールを使い、投げる力を養う運動を行った。まず、新聞紙を丸めてボール状にしたものをナイロン袋に入れて縛り、レジボールを作った。レジボールは普通のボールに比べて軽く柔らかいため、飛びすぎたり危険が伴ったりすることもなく、力いっぱい投げることができる。楽しみながら投げる運動を通して、手首や体の使い方を工夫していた。



【レジボールを投げる様子】

6年 国語科「インターネットでニュースを読もう」

新聞とニュースサイトを比較しながら、目的に応じて必要な情報を見つけることをねらいとした学習を行った。これまでにあまり新聞を読んだことがない児童が多かったため、始めに自分の興味のある新聞記事を集め、新聞の良さや特徴を考えた。次にインターネットのニュースサイトをじっくり読み、新聞とニュースサイトを比較した。児童は、「ニュースサイトの方が記事になるまでの時間が短い。新聞は発信までに時間が掛かるが、その分情報の信憑性がある」「ニュースサイトは関連記事をすぐに見付けることができるが、新聞は図書館等に行かないと過去の記事は探せない」など、それぞれの良さを考えることができた。いくつかの観点に着目して考えることで、新聞とニュースサイトの違いを捉えることができ、目的に応じて読む

お年	女子	読み取り	種類	情報の信頼性	関連記事	ニュースサイト
無料が多い	読みやすい	クイズやゲームなど	動物や自然など	本や雑誌の紹介	本や雑誌の紹介	ニュースサイト
有料	読みやすい	クイズやゲームなど	動物や自然など	本や雑誌の紹介	本や雑誌の紹介	ニュースサイト

【新聞とニュースサイトを比較した板書】

ことの大切さを感じていた。

愛媛新聞forスタディ(㊟スタ)の活用

どの学年においても、㊟スタを様々な場面で活用した。課題を終えた後の時間を使い、㊟スタの記事を読んだり、㊟スタ内にあるクイズに取り組んだりした。㊟スタの記事やクイズは身近な愛媛県内のことを取り上げているものが多く、児童は県内の様々なニュースに興味を持ちながら、積極的に親しんでいる様子が見られた。朝のスキルタイムでは、㊟スタ学習帳の問題を使い、記事を読み取る練習を行った。読解力の育成だけでなく、幅広い知識を得ることができた。



【㊟スタ学習帳の活用】

(3) 新聞をつくる

学習したことや体験したことをまとめたり、自分の考えや思いを発信したりする学習では、新聞にまとめ、伝え合うという手法を様々な機会に取り入れた。新聞づくりを行う際には、㊟スタ内にある「しんぶんさくせいソフト クミハン」を活用した。テンプレートの種類が多く、自分の書きたい内容や分量に合わせて選ぶことができ、「見出し」や「あとがき」といった新聞の構成を学びながら学習の成果をまとめることができた。何をどこから書いていけばいいかわからない児童も多く、「クミハン」を活用することは新聞づくりに大変有効であった。

3年 理科「チョウを育てよう」

チョウが卵、幼虫、さなぎ、成虫と変化していく様子を観察し、昆虫の成長について学ぶ学習では、「チョウのなぞをみんなで見付けよう」と呼び掛け、自分から調べてみたいという探究心を持てるようにした。自分だけが見付けたなぞを周りに分かりやすく伝えるためには、どのような写真を使ったり、見出しや文章を工夫したりすればよいか、実際の新聞から学び、新聞づくりに生かせるようにした。「新聞記者となり、自分だけが見付けたチョウのなぞを記事にしよう」と呼び掛けることで、自分なりの見出しや写真を工夫しようとする姿が見られた。

3年 社会科「農家の仕事」

里芋農家を見学し、畑で里芋を育てている様子や農作業に使う道具を見たり、実際に収穫体験をしたりして、分かったことや感じたことを新聞にまとめた。見学したり経験したりしたことを思い起こし、特に伝えたい部分に焦点を当てて詳しく書いた。感じたことや考えたことを自分なりの言葉で表現する過程で、じっくり考え取り組んでいた。

4年 社会科「都道府県新聞」

47都道府県の位置と名前を学習し、さらに日本についての学びを深めるために、都道府県新聞づくりを行った。自分が調べたい都道府県を一つ選び、有名な食べ物、人物、建物、キャラクター、観光地などについて調べ記事にした。読み手



【児童が作成した新聞】

を意識した新聞になるように、作成前に実際の新聞のレイアウトや注意を引く見出しなどを紹介した。内容に合わせた写真や図を使って記事にしたり、ランキングや4コマ漫画、コラムなどを取り入れたりしながら意欲的に新聞づくりに取り組んだ。記事を書くために様々な情報を集めたが、多くの情報から取捨選択し、どの部分をどのように切り取って伝えるか、何に重きを置いた記事とするかなど、目的意識をはっきりさせて作ることが大切だと感じた。完成した新聞を掲示し、読み合うことで、各都道府県への理解・関心が高まった。



5年 「新宮少年自然の家新聞」

【児童が作成した新聞】

新宮少年自然の家での体験活動を新聞にまとめた。国語科「新聞を読もう」の学習では、新聞を構成する要素として「見出し」「リード文」があることや、どのように配置しているかを実際の新聞から学び、新聞のつくりについて理解を深めた。その学習とも関連させて、読み手を引き付けるために、どのような見出しにすると良いかを工夫したり、挿入する写真の大きさや配置を考えたりするなど、楽しみながらも児童の考える力を養う学習となった。

5 成果と課題

- 新聞に触れる機会を意図的につくることで、新聞に興味を持ち、自発的に新聞を取り取り、読んでみようとする児童が増えた。また、実際に読む機会を持つことで、新聞の良さに気付き、新聞に対する抵抗感が減り、児童にとってより身近なものとなりつつある。
- 始めに、校内研修を通して過年度の実践事例に学ぶことで、教職員間のN I Eに対する共通理解を図り、それぞれの立場でカリキュラムへの位置付けを行った。まずはやってみるという姿勢で、あらゆる学習の場面に新聞を取り入れ、活用することができた。
- 新聞を読むときも、新聞を作るときにも、I C T機器を活用することが多かった。デジタルの手軽さが、新聞との距離を縮める有効な手立てとなっていた。
- 新聞記者をゲストティーチャーとして招き出前講座をするなど、専門的なサポートを受けて新聞について学ぶ機会を持てなかった。次年度は新聞づくりに携わる方から学べる機会を計画したい。
- 今後は、新聞を「知る」「読む」「作る」といった活用の仕方に留まらず、新聞から「考える」「話し合う」「生かす」活動に発展させ、新聞を活用した思考力・判断力・表現力の向上を図りたい。

確かな読解力を育てる授業の在り方

～国語科における場の設定と学習指導の工夫～

久万高原町立父二峰小学校／教諭 尾崎 水由羽

1 はじめに

本校は、上浮穴郡久万高原町にある全校児童19名の小規模校である。豊かな自然の中で、子どもたちは伸び伸びと学校生活を送っている。地域とのつながりが深く、地域や保護者の協力のもと様々な行事を経験している。

本校では、「心豊かで活力ある父二峰っ子の育成」の学校教育目標のもと、「思いやりのある子、よく考える子、たくましい子」を求める子どもの姿として、日々の教育活動に当たっている。

本校には、本を読むことが好きで、自分の思いや考えを進んで発言する児童が多い。しかし、基礎的・基本的な学習内容の定着には個人差があり、語彙の習得が十分にできておらず、文章を正しく読むことが難しい児童もいる。そのことから、自分の意見がもてない児童もいる。

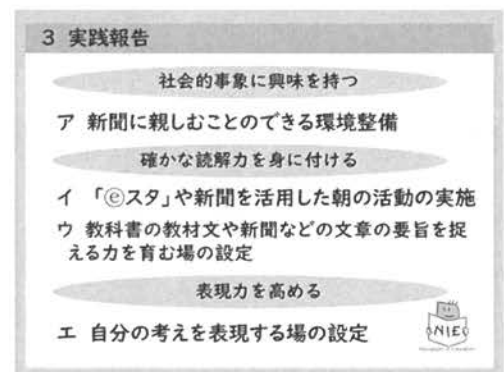
2 研究のねらい

研究主題を、「確かな読解力を育てる授業の在り方—国語科における場の設定と学習指導の工夫—」とした。児童の読むことへの意欲を向上させ、「社会的事象に興味を持つ」、「確かな読解力を身に付ける」、「表現力を高める」の3点を達成することをねらいとした（資料1）。

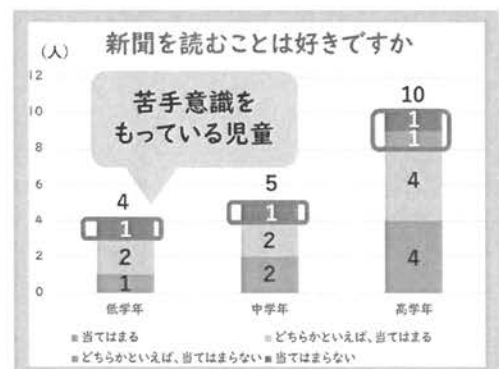
3 実態調査

実践を行うにあたって、全校児童を対象に実態調査を行った。「家で新聞を購読していますか」という設問に対して、「はい」と答えた児童は21%であった。「新聞を読むことが好きですか」という設問に肯定的な回答をした児童の割合は78%であり、どの学年にも苦手意識をもっている児童がいた（資料2）。「難しい漢字があると読みにくい」「おもしろいと思わない」「普段あまり読まないから難しい」などの意見があった。

これらのことから、新聞に触れる機会が少なく、新聞に対して苦手意識をもつ児童が一部いることが分かった。



【資料1 研究のねらいと方法】



【資料2 実態調査】

4 実践報告

(1) 新聞に親しむことのできる環境整備

新聞に親しませ、社会的事象に興味をもたせる手立てとして、1学期に図書室前に「N I Eコーナー」を設置した(資料3)。児童の関心のありそうな記事を教員が掲示し、記事の感想や意見を付箋に自由に書いて貼ることができるようにした。その結果、県内の身近な話題に関心を持つことができた。

2学期からは、いつでも新聞を読めるように、児童が一番通る玄関に「N I Eコーナー」を移動した(資料4)。全国紙が届くようになり、全国のニュースにもたくさん触れられるようになった。毎朝、図書委員の児童が新しい新聞に替え、新しい記事を読むことができるようにした。友達の作った新聞やスクラップも掲示し、読んだ感想を付箋で共有できるようにした。



【資料3 「N I Eコーナー」(1学期)】



【資料4 「N I Eコーナー」(2学期)】

(2) 「©スタ」や新聞を活用した朝の活動

ア 「N I Eタイム」の設定

週2回、朝の活動として20分間の「N I Eタイム」を設定した。「©スタ」の新聞記事を読んでおすすめの記事を友達に紹介したり、「©スタ学習帳」の問題に取り組んだりした。新聞スクラップでは、読んだ記事の中からお気に入りのものを選んでまとめた。当初、記事の内容をそのまま書く児童が多かったが、取組を通して5W1Hを意識しながら分かりやすく要約できる児童が増えた。

イ 「N I E集会」の実施

「N I Eタイム」での成果を発表する場として、「N I E集会」を開いた。集会ごとに担当の学年を決め、それぞれの取組を発表した。

高学年は、新聞スクラップを紹介し、新聞記事についての感想を交流した。また、高学年が中心となり、縦割り班である「なかよし班」に分かれて大きな新聞スクラップを作成した(資料5)。上学年が下学年に記事の内容を伝えたり、記事の内容に関連する知識を話したりする姿が見られた。



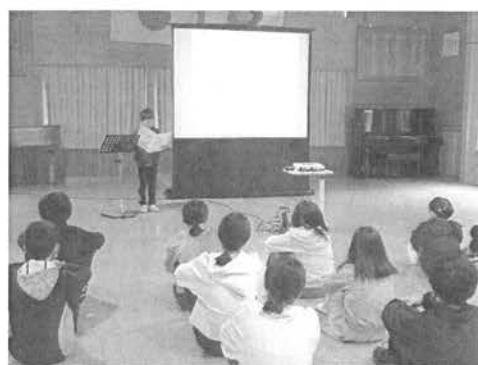
【資料5 スクラップ作成の様子】

中学年は、他学年におすすめの記事を紹介した。難しい言葉を国語辞典で調べるとよいことを勧め、辞書引き対決を行った(資料6)。

他の学年の発表を見た低学年も、スクラップの発表に挑戦した。おすすめの記事を選んで読み、そこからクイズを出題した(資料7)。



【資料6 国語辞典を引く児童】



【資料7 発表する低学年児童】

(3) 文章の要旨を捉える力を育む場の設定

ア 出前講座

愛媛新聞社の方を講師に招き、出前講座を実施した（資料8）。低学年は、新聞の紙面構成やレイアウトの基本について学んだ。グループで行うことにより、写真を多面的に見ることができ、新聞を読む楽しさを味わった。中・高学年は、新聞の書き方や見出しの付け方、レイアウトの工夫などについて学んだ。実際にリード文を書く活動を通して、5W1Hを意識して文章を簡潔に書くことの大切さを感じていた。



【資料8 出前講座の様子】

イ 国語科での実践①

第5学年「新聞を読もう」

単元の導入では、複数の新聞を実際に見たり読んだりする活動を通して、新聞のひみつを探った。その中でも一面に着目させることで、新聞を構成する要素とその役割について理解することができた。同じことがらについて書かれた2紙の比べ読みをすることで、同じ出来事であっても論の進め方や表現の仕方に違いが表れることに気付くことができた。

ウ 国語科での実践②

第6学年「インターネットでニュースを読もう」

同じ出来事について書かれたニュースサイトと新聞の記事を比較し、相違点やよさを見付けることで、必要な情報を調べるときにどの媒体を使うとよいかについて考えた。

(4) 表現力を育てる場の設定（新聞作り）

出前講座や「NIE集会」での学びを生かして、「クミハン」で新聞を作った（資料9）。

低学年は植物の成長の様子について、読む人のことを考えた写真と文章で分かりやすくまとめた。

中学年は、自分たちの地域に伝わる伝説について調べ、まとめた。友達に読んでもらうために、記事の見



【資料9 「クミハン」で作った新聞】

出しにも工夫を加えていた。

高学年は、学習のまとめや行事等の思い出をまとめた。限られた字数の中で、自分が伝えたい事柄を選んで書いた。

児童にとって新聞にまとめることが身近になり、委員会でも、児童が進んで新聞を作り、発行するようになった。季節の変化を知らせたり、行事の後に友達にインタビューをして記事を書いたりした。

5 成果（○）と課題（●）

- 「N I Eコーナー」の作成や朝の活動の設定により、新聞に触れる機会が増え、社会的事象に興味をもつ児童が増えた。
- 文章の要旨を捉える力を育む場を多く設定したことにより、文章を読もうとする意欲が高まってきた。
- 表現力を育てる場の設定を行ったことで、自分の考えをもち、それを表現する力が高まってきた。
- 文章を読んで正しく内容を理解できていないことがある。今後も継続して国語辞典を使って語彙を増やしていきたい。
- 紙の新聞は、振り仮名がないものがほとんどで、低学年を中心に内容を正確に理解することが難しい児童もいる。そのため、どの記事を扱うかを教師が情報を事前に精査し、効果的に活用していきたい。
- 学びを深めるためには、要約した文を友達と比べ合う等の時間を設定する必要がある。

読みたい！知りたい！伝えたい！がいっぱいのN I E

～確かで豊かな語彙力、読解力、表現力の育成を目指して～

鬼北町立泉小学校／教諭 酒井 浩子

1 はじめに

本校は、全校児童38名の小規模校である。周りは山々に囲まれ、学校のすぐそばを四万十川の支流の一つである広見川が流れる自然豊かな場所にある。また、縄文時代、弥生時代の歴史遺産が発掘されたり、人形浄瑠璃「鬼北文楽」や古くから伝わる手すき和紙「泉貨紙」などの伝統文化を保存継承していたりする地域でもある。児童は明るく素直で、学習にも運動にも一生懸命に取り組んでいる。

N I E活動を実践するにあたり、新聞購読家庭数を調べたところ、29家庭中9家庭であった。家庭生活では、新聞に触れる機会がない児童が多いため、いかに新聞に触れ、身近に感じさせることができるかが重要であると考えた。そこで、図工や体育の授業でも、新聞に触れる活動を多く取り入れ、新聞が身近なものであることに気付かせることからスタートした。



資料1 新聞に触れる活動の様子

2 研究のねらい

児童の「読みたい！」「知りたい！」「伝えたい！」という3つの思いを大切にN I E活動を通して、確かで豊かな語彙力、読解力、表現力を育成する。

1 研究のねらい

読みたい！ 新聞を身近に感じ、進んで新聞記事を読む児童

知りたい！ 社会の出来事に関心を持ち、詳しく知ろうとする児童

伝えたい！ 自分の思いや考えを生き生きと表現する児童

NIE活動を通して、
確かで豊かな語彙力、読解力、表現力を育成する。

資料2 目指す児童の姿

3 本校の取組

(1) N I Eコーナーの整備

児童の「読みたい！」という思いを膨らませる手立てとして、廊下にある7つの掲示板を利用して、1週間分の新聞を掲示している。児童の目に触れる場所に新聞を掲示することで、給食前の準備や歯磨きの時間、教室移動の際など、何気ない時間に友達や先生と一緒に新聞を読む児童の姿が見られるようになった。



資料3 N I Eコーナーの様子

(2) みつけタイムの設定

新聞に触れる機会を増やし、児童の「読みたい！」という思いを膨らませる手立てとして、全学級で取り組んでいるのが「みつけタイム」である。学年に応じて、毎回テーマを決め、そのテーマに沿った写真や言葉を新聞から見付け出す活動を行っている。写真や言葉から新聞記事に興味を持ち、記事の内容を熱心に読み入る児童も見られる。また、普段生活の中であまり使うことのない言葉に触れることも多く、その言葉の意味や使い方を確認するよい機会となっている。



資料4 みつけタイムの様子とテーマ例

(3) 愛媛新聞社出前講座

新聞のことを知り、新聞をより身近に感じられたら、児童の「読みたい！」という思いが膨らむのではないかと考え、愛媛新聞社出前講座を実施した。低学年は、「新聞を広げてみよう」をテーマに、新聞の基本を知ったり、興味のある写真を切り抜いたりした。中学年は、「新聞の基本を知ろう」をテーマに、新聞の紙面構成や記事の構成を学んだり、ICT教育サイト「@スタ」の機能や使い方を学んだりした。高学年は、「新聞を知ろう、読もう」をテーマに、新聞の特徴や記事のポイント、見出しの付け方やリード文の作り方を学習したり、実際に作成中の新聞を見てもらい、アドバイスを受けたたりした。



資料5 愛媛新聞社出前講座の様子

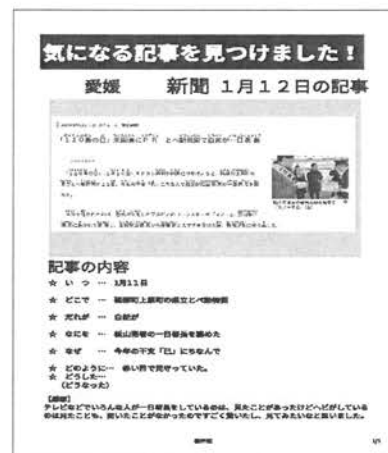
(4) @スタの活用

朝の活動として、@スタの「ニュースを読む」の中から、児童が「読みたい！」「知りたい！」と思う新聞記事を選んで読む活動を全校で行っている。ルビ付きで表示されるので、低学年でも抵抗なく読むことができています。

また、高学年は、気になる記事についてまとめる活動を、週に1回、家庭学習として行っている。

最初は、5W1Hを正しく読み取ることができない児童もいたが、継続して取り組むことで、正確に読み取ることができるようになってきた。また、友達と記事の情報

を共有し、読み合うことで、もっと正確に、分かりやすく「伝えたい！」という思いを持ち、何度も読み返したり、言葉を選んで記入したりする児童が増えてきた。



資料6 ◎スタを読む1年生の様子と高学年の新聞記事まとめ

(5) 新聞スピーチ

高学年は、毎朝、朝の会で気になった記事について紹介する活動を行っている。児童は、友達に「伝えたい！」という思いを持って、記事の内容を要約し、感想を発表している。その発表を聞いて、「いつの新聞？あとで読ませて！」などと、友達が紹介した記事に興味を持ち、「読みたい！」「知りたい！」という思いを持つ児童の様子が見られた。



資料7 新聞スピーチの様子

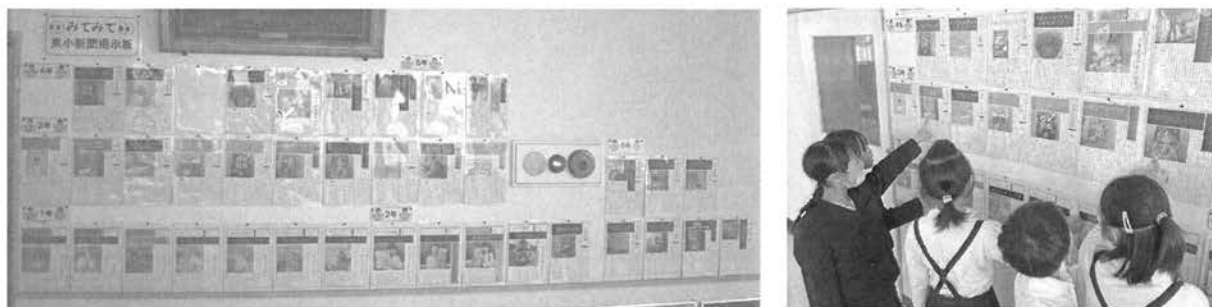
(6) 新聞の作成・掲示

新聞の作成は、児童の「伝えたい！」という思いが形となる活動である。◎スタのクミハンやロイロノートを活用して、全校で取り組んだ。どの学年も各教科の学習のまとめ、体験活動の振り返り、日記の代わりとして新聞を作成した。



資料8 児童が作成した新聞

そして、「伝えたい！」という思いが形になった新聞を全校児童が目に見ることができるよう「みてみて泉小新聞掲示板」に掲示することにした。友達の新聞は、一般の新聞以上に「読みたい！」という思いを強くし、掲示板にかじりついて見ている児童の姿がよく見られた。全校児童共通のテーマの新聞が並ぶこともあれば、各学年で作成した様々なテーマの新聞が並ぶこともあった。



資料9 「みてみて泉小新聞掲示板」と友達の新聞を読む児童の様子

4 成果と課題

(1) 成果

- ・ 全校児童が楽しみながら、新聞に親しむことができています。
- ・ 教職員の共通理解を図りながら、各学級で計画的にN I E活動に取り組むことができています。
- ・ 児童の「読みたい!」「知りたい!」「伝えたい!」という3つの思いがうまく連鎖しながら、更に膨らんでおり、期待していた児童の姿に近付いている。
- ・ 確かに豊かな語彙力、読解力、表現力の育成に向けて、少しずつではあるが、児童の変容が見られる。

(2) 課題

- ・ 児童の「知りたい!」を引き出すための手立てや取組が不十分であった。
- ・ 授業の中で、新聞を活用して調べたり、各教科の学習内容と関連のある新聞記事を授業に取り入れたりして、児童の「知りたい!」という思いをかき立てるような取組を実践する必要がある。
- ・ 学級毎のN I E活動だけでなく、全校児童全員で一緒に取り組む「みつけタイム」など、更なるN I E活動の充実を図りたい。
- ・ 保護者を巻き込んだN I E活動の実践を行い、学校だけでなく、家庭でも新聞に親しみながら、確かに豊かな語彙力、読解力、表現力の育成を目指したい。

友達や家庭、地域との豊かなつながりを通して、ともに学び合う子どもの育成

松山市立小野小学校／教諭 椎森 公徳

1 はじめに

本校は、NIE全国大会研究実践校の指定を受け、昨年度は「人やものとのつながり、自分の考えを自分の言葉で伝え行動する子どもの育成」を主題として研究を行った。総合的な学習の時間を中心に各教科等においては、課題や単元構成を工夫し、「学び合い」の場を保障した授業を行ったり、新聞やICT機器の特性を生かした学習指導や環境づくりをしたりすることで、人やものと深くつながる「学び合い」が充実し、表現力や自己発信力が向上した。また、新聞記事を読むことで、表現する際の児童の語彙に広がりが見られたり、高校生から高齢者まで様々な年代の地域の人々に、自分の思いや考えを自分の言葉で伝えたりすることもできた。このように人やものとのつながる研究実践を通して、地域とのつながりを感じたり、新たなつながりを作ったりすることができた。

しかし、話し合いの際、自分の考えを自分の言葉で発言することが苦手な児童がまだまだ見られることが課題として残った。自分の考えを持つことそのものが苦手な子、自分の考えを一方的に言って満足してしまう子が少なくない。さらに、人の話を聞く態度や話の内容を正しく聞き取る力にも課題があり、その育成が急務であると考えた。

そこで、「友達や家庭、地域との豊かなつながりを通して、ともに学び合う子どもの育成」を研究主題と設定し、その中でNIEの取組を通じて、児童を育てることを目指すこととした。

2 今年度のNIEについての取組

大きく2つの活動に重点を置いて取り組んだ。一つは、毎朝の10分間の学習時間に取り入れているNIEタイムを、友達や家庭とのつながりや関わりを意識した内容となるよう見直すこと、もう一つは、授業の中での効果的な新聞活用を図ることである。以下にその一部を紹介する。

(1) つながりを意識したNIEタイム

ア 児童同士がつながる、新聞記事について感想交流（3年生）

1か月を1サイクルとして、新聞記事を基に意見を交流する活動を行った。

① 1週目：⑥スタに掲載された記事を自由に読む。

② 2週目：教師が選んだ四つの記事を読む。

③ 3週目：読んだ記事から一つを選び、感想を書く。

④ 4週目：グループで感想交流をする。

四つの記事は、ロイロノートを使って4色のカードに記事を貼り付け、自分が選んで感想を書いたカードのみを提出させた。発表時は「回答の共有」機能を使って、グループ内で読み合った。カード

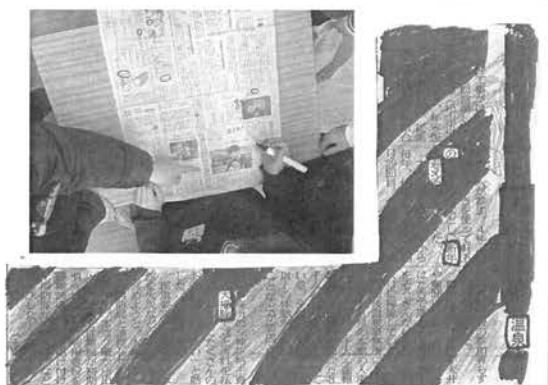


【ロイロノートの提出箱の回答共有の画面】

の色を分けることで、誰がどの記事を選んだか、同じ記事でも人によって受け止め方が違うことを容易に理解することができ、感想交流が活発になった。

イ 新聞に親しみながら友達と関わる活動（4年生）

新聞を黒く塗りつぶして俳句を浮かび上がらせる「クロヌリハイク」に取り組んだ。友達と協力して記事から季語を見付けたり、児童が気に入った言葉をつないで俳句を作ったりした。季語を探す活動を行う中で、自分が知らなかった季語をたくさん見付けることができていた。作品はペアやグループで紹介し合い、作品に込めた思いや作る際に工夫したこと等を発表して意見交流を行った。0から俳句を作るより抵抗が少なく、友達と関わりながら楽しく俳句作りに取り組むことで、俳句を次々と作ろうとする子どもの意欲につながった。



【活動の様子(上)と子どもの作品(下)】

ウ 家庭とつながる◎スタの感想交流（5年生）

家庭学習や朝の10分間の活動時間を使って、新聞記事の要約と感想を書いたり、それを発表したりする活動を行った。その後、家庭で記事の内容や感想を保護者等に伝え、メッセージをもらうという活動を繰り返した。回数を重ねるごとに、記事の要点を適切につかむことができるようになった。また、児童が新聞に慣れ親しんだり、表現力が向上したりすることにもつながった。

保護者に学校での学習活動の一部を理解してもらうことを通じて、親子で共に新聞に触れる機会にもなっていた。

- ①日曜日：ジュニア新聞を読む。
- ②月曜日：新聞を読んで要約や感想書く。
→ 書いた感想を家庭に持ち帰り、家の人に伝え、感想を書いてもらう。
- ③ 木曜日：学級で感想交流をする。

【1週間の活動計画】

名前	
新聞記事について書こう 〇月 〇日 (〇) の記事「ずんずんがたいふ」	
記事の内容 (いつ・どこで・だれが・どんなことがあったのか)	すごい地震やてい電やとにそな えて自分でできることをかいて していた。ファイアスターを使った 火のつけ方やご飯のたき方なども のっている。
記事の感想	11月地震が起きるかわからない ので準備ことはしておいたほう がいいなと思いました。自分もわかってみたい です。
(母)から	家族に防災ずんずんを勉強していた。 ずんずんおはて一歩と勉強している。 ずんずんおはて一歩と勉強している。 ずんずんおはて一歩と勉強している。

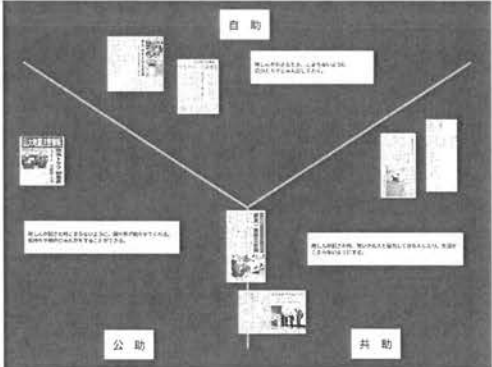
【家族から感想をもらったワークシート】

(2) 授業の中での効果的な新聞活用

昨年度までに総合的な学習の時間を中心に教科等で取り組んだN I Eの学習活動は、年間指導計画の中に位置付け、今年度も引き続き行っている。

また、今年度も新たに新聞を活用した授業づくりに取り組んだ。松山市では、「主体的・対話的で深い学び」を目指し、「松山の授業モデル」を使って授業改善を行っており、本校でも、授業を構想する中で「松山の授業モデル」を核として指導案を作っている。今回は、「学習課題の設定」と「交流し考える学習」を構想する中で、新聞を活用した例を紹介する。

【社会科「地震からくらしを守る」単元計画（４年生）】

時	学 習 内 容	評価規準と評価方法
1 ・ 2	○ 新聞記事や年表を基に、過去の地震の被害や対応を中心に調べ、地震が私たちの生活にどんな影響を与えるかを考えて学習問題を作る。 《新聞記事を基に身近な地域で起こった地震や地震被害について知り、考えたことを話し合う。》  【導入で用いた今年度の記事】	予想や学習計画を立て、学習問題を解決する見通しを持つ。(発言) 【主】 地震災害時における人々の生活に着目して、問いを見いだしている。(発言) 【思・判・表】  【新聞記事から被害を考える活動】
3 4 5 6 7 8	○ 家庭では、地震に備えてどのような取組をしているのか事前に調べたことから話し合い、理解を深める。 ○ 学校や地域の写真を見て、学校や地域などの地震への備えについて理解を深める。 ○ 市役所や警察などの公的機関などの地震に対する備えについて理解を深める。 ○ 市と住民が連携して対策に取り組んでいることを理解する。 ○ 地域の人々が助け合って地域を守ろうとする自主防災組織の活動について理解を深める。 ○ 自助・共助・公助の「三助」についてロイロノートに分かりやすくまとめる。 《地震に対する備えについての記事を、三助に分けて、言葉の意味や具体的な対策を考える。》	必要な情報を集め、読み取り、家庭では、地震が起きる前の準備と起きてからの対策をしていることを理解している。 (ロイロノート) 【知・技】 地域の関係機関や住民は、自然災害に対し、様々な協力をして対処してきたことを理解している。 (ロイロノート) 【知・技】 必要な情報を集め、読み取り、市や県では、地震に対する準備や対策などしていることを理解している。 (ロイロノート) 【知・技】 市と住民が連携して災害に対する準備や対策をしていることについて理解している。 (ノート) 【知・技】 地域の関係機関や住民がどのように地震に備えているのか理解している。(発言・ノート) 【知・技】 家庭、学校、市全体、住民は、連携協力をして、地震に対して、それぞれの役割を果たしながら対策や準備をしている。 (発言・ロイロノート) 【知・技】  【子どものロイロノートより】

9	○ 災害が起こった時にどのような行動が取るべきかを学習したことを基に友達と話し合い、考えを深める。	災害について自分事として捉え、どう備えるか考え、表現している。 (発言・ロイロノート)【思・判・表】  【災害への備えを発表する様子】
---	--	---

3 成果と課題（成果○と課題●）

(1) つながりを意識したN I Eタイム

- ふりがな付きのデジタル新聞は、児童にとって読みやすく、自分の考えを深めるのに役立った。スピーチでの新聞記事の発表や記事を基に意見交流をする活動が、身近な社会的事象に興味や関心を持つきっかけになった。
- ジュニア新聞の感想を持ち帰り、家族に伝える活動は、家庭を巻き込み充実した活動となった。児童の気付きに家族が共感することで、新聞記事を読んだり、感想を書いたりする意欲が高まった。
- 新聞記事の感想を書くときには、5 W 1 Hを意識して書かせた。記事の5 W 1 Hの並べ方には、Who→(When/Where)→What→(How)→(Why)の順があり、このことを意識すると、記事を理解することができたようである。
- ジュニア新聞で、教科の学習に直接つながる内容を見つけることは難しい。一般向けの新聞記事の内容を十分に理解させることも難しいため、必要に応じて、教師は児童が記事の内容を理解できるような手立てを講じる必要がある。

(2) 授業の中での効果的な新聞活用

- 号外や一面の新聞記事を授業の導入で用いることは、とても効果的であった。大きくて簡潔な見出しは、記事の内容を理解するのに時間のかかる児童にとって、見てすぐに分かるという点でも印象に残るものになっていた。
- 渇水、震災、戦争など、児童にとって経験のない過去の出来事を、記事の内容を詳細に読み取ることで、人々の生活の様子について、実感を伴って理解することができた。
- 児童が自分に必要な新聞記事を見つけ出すのに時間が掛かる。記事のキーワード検索に慣れるよう、より日常的に◎スタを活用することが必要である。

持続可能なN I Eを目指して

愛媛大学教育学部附属小学校／教諭 幸島 恭輔

1 学校としての取組

附属五校園では、共通教育理念である「未来を拓く人材の育成」の下、互いに連携を図りながら教育活動を進めている。本校では、令和4年度から6年度まで、研究主題を「子どもが創る『探究的な学び』をデザインする」として、子どもが学びの主角として探究心を持って問いに立ち向かう姿を目指して、教師が子どもの学びをどのように支えていくかを探ってきた。

新聞についての子どもの意識を把握するため、子どもに新聞についてアンケートを行ったところ、普段新聞を読まないと答えた子どもが半数以上であることが分かった。新聞を身近に感じ、新聞のよさを知って生かすために、まずは新聞を手に取りやすい環境を作ることから始め、これまで以下のような取組をしてきた。

(1) 新聞コーナーの設置

6年生教室の前に毎朝、その日の朝刊を掲示したり、過去3週間分の朝刊や「ジュニアえひめ新聞」を廊下に置いたりすることで、いつでも新聞を手にとることができるようにした。また、イベントの記事や投稿などで本学級の子どものことが新聞に掲載されたときには、学級で紹介したり、記事を大きく貼り出したりした（資料1）。広いスペースを確保することはできなかったが、子どもがよく通る通路に新聞を置いたことで、新聞を目にする機会が増えた。



資料1 新聞コーナー

(2) 図書館の新聞コーナーの設置

図書館でも新聞に触れることができるように、新聞コーナーを設置した。図書に関連のある新聞記事を掲示したり、こども新聞のバックナンバーをためていったりすることで、新聞を身近に感じられる環境を整えた。



資料2 図書館の新聞コーナー

(3) 新聞記事の紹介

イベントの記事や投稿などで本学級の子どものことが新聞に掲載されたときには、学級での朝の会の時間や、全校朝会で紹介したり、記事を大きく貼り出したりした。

(4) 新聞への投稿

新聞を読むことにとどまらず、子どもたちが新聞を通してよりよい発信者になるために、新聞に投稿する活動を行った（資料3）。国語科「詩をつくろう」で書いた詩をたくさんの人に読んでもらいたいという子どもの思いから投稿した詩が新聞に掲載されると、子どもたちは自分の言葉がたくさんの人たちに届いたことに喜びを感じていた。



資料3 詩の投稿

このような取組の中で、子どもは新聞を身近なものに感じ、新聞を手に入る機会は確実に増えており、新聞を読む「読者」として育ってきているという実感をもつことができた。

そして、令和5年度に行われた「N I E全国大会松山大会」では、教科等横断の視点に立ち、総合的な学習の時間で松山の魅力を発信する活動を行う中で、国語科として育みたい「言葉の力」を子ども自らが見だし、言語活動を通してその力を育てていくための授業を公開した。「県外の人たちに松山の魅力を伝えたい」という子どもの思いを一番に据えながら、教科を超えてその思いを実現するための学習を積み重ねていくことで、子どもは「探究的な学び」を実現し、自分の言葉で、確かに豊かに発信していた（資料4）。大会を通して、新聞は読むものであると同時に、発信する媒体でもあることを再認識した。児童も初めはただただ読むだけだったが、新聞にして発信したり、詩や俳句を投稿したりしたことをきっかけに、次第に発信する楽しさを知り、たくさんの人に自分たちの言葉が届く喜びを味わっていた。書く側になったときに初めて学ぶことも多く、言葉を受け取ること（読む、聞く）と発信すること（書く、話す）をバランスよく経験することが、子どもの「言葉の力」を育むことにつながり、新聞はそのための大きな役割を担っていることを実感した。



資料4 N I E全国大会の様子

ただ、今後も新聞を通して子どもたちが学び続けることができるようにするためには、無理なく続けられる、「持続可能なN I E活動」が必要ではないかと考えた。

新聞について本校教職員にアンケートを採ったところ、半数以上の教職員は新聞を読む習慣がないということが分かった。そこで今年度は、新聞がよい教材になることをまずは教職員が自覚し、I C T機器を活用しながら無理なく情報共有ができる方法

を採った。

2 实践事例

(1) Microsoft Teams を使った教員間の情報共有

本校では、Microsoft Teams(以下Teams)を使って教職員間のやりとりを行っている。そこで、このTeams内で新聞記事の情報を共有することにした。

本校は松山市の中心部に位置しており、校外に出向いて学習をする機会も多い。また、地域のイベント等に参加することもよくあり、児童の様子が新聞記事になることも少なくない。児童に関する新聞記事を見付けたときには、Teamsで共有することにした（資料5）。そうすることで、新聞を読む習慣がない教員でも、記事を教材として扱えるようにした。

この取組を続けていたところ、新聞を毎日読んでいる教職員から記事について情報を共有する投稿をしてくれるようになり、教職員全体で、新聞を活用する機運が高まっていくことを感じた（資料6）。子どもの美術作品が掲載された記事や、ジュニアえひめ新聞の防災に関する記が教職員の中で共有された。

(2) データベースの活用

本校では、愛媛新聞データベースを使用することができる。そこで、このデータベースを活用して、本校児童に関係する記事を探したり、授業内容に関係する記事を検索したりすることで、新聞活用の幅を広げることができた（資料7）。図書館で授業に関する本を探すのと同じように、新聞データベースで記事を探すことが可能となり、教材研究の幅も広がった。

昨日は出初式おつかれさまでした。
今日の朝刊新聞紙面にはなかったですが
もう見られたかもしれませんが、デジタル版がありました。

先週のことですが、くんが愛媛新聞に載っていましたね。
俳句頑張ってますね！

11:10

MK

全然知りませんでした！
紹介しておきます。
ありがとうございます！

資料5 Teamsによる情報共有

TT 2024/11/25 8:01

防災について

ジュニアひめ新聞に 先生とお子さんの記事が掲載されていました。
防災について今一度考えてみましょう。

OM 2024/12/24 18:19

今日の愛媛新聞

本日の愛産新聞、13面。先生のお仕事頑張っている姿が、掲載されています！

024/12/25 11:45
先生、おつかれさまです！
今日の紙面には、3年 さんの作品が載っています。

ありがとうございます。特選の子どもの名前も載っているので、ぜひ新学期に紹介してあげてください。

資料6 他教員による情報共有

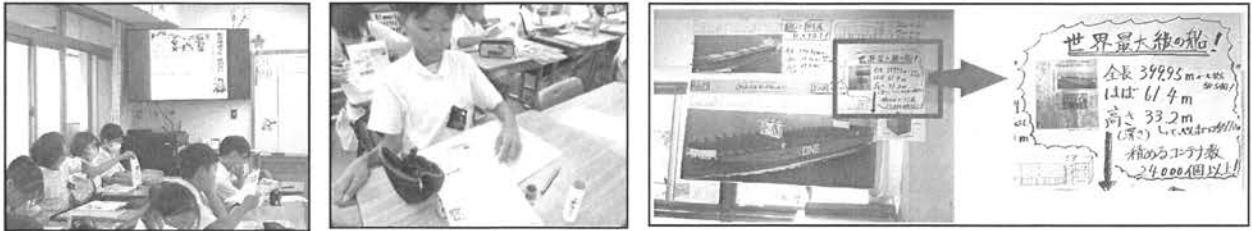
[illegible]

資料7 データベースの活用

3 実践を終えて

(1) 実践前後の変化

本実践を通して、新聞記事を教材として活用するための情報共有ができたことにより、普段の授業の中でも新聞を活用している様子が見られるようになった（資料8）。ICTを活用することで、新聞記事を教材として活用しやすい環境を整えることができた。



資料8 授業の中での新聞活用

(2) 成果と課題

- ICTを活用することで、無理なく誰でもNIEの活動が続けられる環境づくりをすることができた。
- 教員が新聞を身近に感じ、授業に生かすことができた。
- 新聞を様々な教育活動で活用するために、各教科での活用の方法を考えたり、新聞を全校の子どもたちや教職員がもっと身近に感じたりできるような仕組みを今後検討していきたい。
- 実践指定校を外れても、デジタルとアナログのそれぞれのよさを生かしながら、持続可能なNIE活動が展開できるよう、実践を積み重ねていきたい。

生徒の表現力を伸ばすとともに、様々な社会的事象に対する興味・関心を高めるNIE活動の実践

今治市立桜井中学校／教諭 蟹江 浩之

1 はじめに

本校は、今治市の南部に位置し、1～3年が各学年2学級、特別支援学級3学級、全校生徒227名の学校である。地域社会の一員として、桜井地区の歴史や文化を学ぶ地域体験学習、白砂青松の志島ヶ原の松を守る活動やアマモ播種などの環境学習、アルミ缶回収による車椅子贈呈や福祉体験学習、有志による獅子舞保存活動等、地域の人々と交流できる活動を多く実施している。このような環境の中、学校教育目標である「たくましく生きる生徒の育成」を目指し、日々の教育活動に取り組んでいる。

2 ねらいと目標

本校生徒は、大変素直で純朴な生徒が多く落ち着いた学校生活を送っている。学校行事や生徒会活動にも熱心に取り組む生徒も多い。しかし、その反面、文章を書くことを苦手としている生徒や発言するときも単語で答える生徒が多く、生徒一人一人の表現力を育てていく必要がある。また、一人あたりのスマホ等の利用時間も長いため、SNS等から入ってくる情報には詳しいが、知識に偏りがある傾向が強い。

そこで、本校のNIE活動の研究テーマとして「生徒の表現力を伸ばすとともに、様々な社会的事象に対する興味・関心を高めるNIE活動の実践」を掲げ、実践を行うこととした。また、本校の取組のキーワードとして「いつでも（多くの場面）、どこでも（全教科）、楽しんで（無理のない範囲）」とした。これは、生徒の実態を踏まえ、すべての教育活動でNIE活動を行っていくことが生徒の表現力を伸ばすことにつながっていくと考えたからである。

3 実践内容

(1) 校内体制づくり

教職員は、NIE部会（校長、教頭、教務主任、研修主任、学力向上推進主任、各学年NIE担当教師）を立ち上げ、校務分掌に明示し実践内容について研究している。生徒は、学習委員会の活動内容の中に「NIE活動」を取り入れ、各学年や学級ごとにNIE活動の実践を行った。

(2) 校内環境の整備

① 各学年フロア

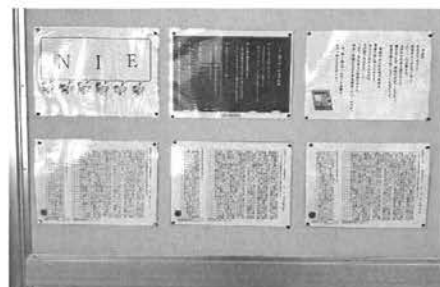
各学年のフロアにNIEコーナーを設け、9～12月の間に新聞を2紙ずつ配置した。新聞の配



置については、2週間ごとに各学年をローテーションすることで、生徒は様々な新聞の読み比べを行えるようにした。新聞の準備や整頓は、学習委員会が行った。

② 図書室全校NIEコーナー

全校生徒が利用する図書室前に、NIEコーナーを設け生徒作品等を展示した。学習委員会が担当し、生徒が読み手の興味を引くように工夫しながら掲示を行った。



(3) NIEタイムの実施

① 毎週金曜日

毎週金曜日に朝読書の時間(10分)で、愛媛新聞◎スタ記事や廊下の新聞より生徒が気になる記事を読み、基礎学習の時間(10分)で、共働学習アプリを用いて感想を記入し提出をした。提出した感想は、学級担任が紹介したり生徒間で読み合ったりすることで、生徒は多様な意見に触れることができた。

② 帰りの会

学校に新聞が届いている9～12月の間、日直が各学年フロアに置いてある新聞から興味がある記事を選び、帰りの会で紹介し感想を発表する活動を行った。9月当初は短文で感想を発表する生徒が多かったが、回を重ねるごとに内容も文章量も充実していく生徒が増えていった。新聞が届かなくなった1月以降も、3年生では、各自の気になるニュースを発表する活動を続けた。

3年 2組 名前

○ 記事のテーマ(短くまとめよう)
今治・波方小で平和学習

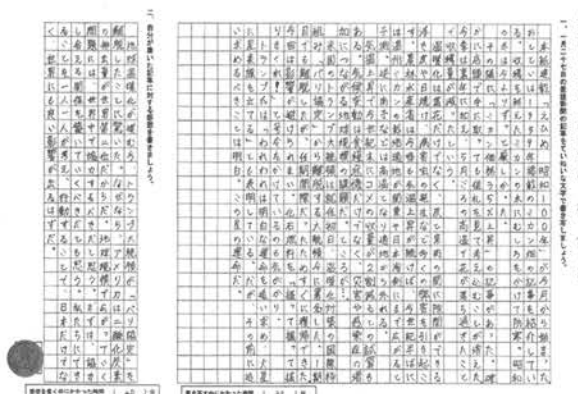
○ 新聞を読んだ感想

戦争の悲惨さは、いつになっても変わらないので、二度と戦争を侵さないためにも、私達が戦争について理解し、色んな人に伝えていかなければならないと思いました。戦争の恐ろしさは、ネットで調べるのではなく、実際に現地に行ってみるのがいいと思うことができました。私は、広島の前庭ドームに行ったことがないので、一生のうちに一度は訪れて、戦争について、改めて感じたいと思いました。ノーベル平和賞をきっかけに、世界中の人が戦争を無くす、核兵器を無くす努力をしていったらいいと思いました。



③ 視写

愛媛新聞の「地軸」を視写する活動を行った。落ち着いて書き写すことができるように、「地軸」の記事をA3用紙に転記し、生徒へ見本として配布し視写を行った。視写の後には、各自で記事に対する感想を記入するとともに、視写や感想を書くのにかった時間も記入させた。良い作品は、NIEコーナーへも掲示を行った。また、この活動に興味を持った保護者からは、家族で視写を行い学校へ作品を提出してくださった方もいた。



(4) 授業展開で活用

授業において、全教科で新聞を活用した。導入時や展開場面など各教科、各単元

本紙連載「えいめ」昭和十一年から今月（四月）迄の間に、わが國に於ける收獲を終へたミシンの木はむしろ少く
けて防食。昭和の冬は今より少し厳しくもなつてゐる。
その隣に、ミシンを植へたところ、上りの記事があつた。
種かたは店頭で手に取つても僅れを見て考えこんでく
が増えた。今季は夏年に比し五月までの高温で花
が育ち過ぎたので收穫量が減つたといふ。
温暖化は落花でなく皮と果肉の間に隙間が
できる。さやや日焼け。病害虫の侵入も多く被害
を及ぼす。又、農林水産省からは食糧品として受け付け
るべきには、滋州ミシンの栽培適地、関東や日本海側
にまで広がると予測。遂に南干ばちは高温となり過地に
外れる。

気温低下で今世紀末は氷の量が二割減るとの試算
もある。氣候変動は食糧危機だけでなく災害とも
感度の増加につながる。地球規模の課題だ。ところが
米国の上院大統領は就任初日、温暖化対策を
国際枠組みで公平協定から脱却して大統領令に
する。二週目でも離陸したが任期開始のため
暫らく後押された。

今回は影響が避けられず、化石燃料を「掘り掘り」
掘りまくれば、われわれは明白な運命を辿るの
だ。星に足光輝くを立てるべしとは表明している。だが、
この星の運命だ。

[illegible]

総合的な学習の時間では、全校で各学年の活動のまとめとして、1人1作品のデジタル新聞づくりを行った。1年生は地域学習、2年生は職場体験学習、3年生は福祉体験学習のデジタル新聞を作成した。完成した作品は、廊下や文化発表会で展示をしたり、愛媛新聞中学生クミハン新聞コンクールに応募したりした。コンクールでは、2作品が優秀賞に、4作品が入選することができ、生徒の表現力の向上につなげることができた。

4 生徒の変容

— 24 —

資料 1

質問	令和 6 年 9 月	令和 6 年12月
初めて読む文章の内容をよく理解することができますか。	6 4 %	7 5 %
自分の調べたことや考えをレポートや文章にまとめることが得意ですか。	3 4 %	3 9 %
自分の調べたことや考えをみんなの前で発表することが得意ですか。	3 4 %	3 6 %
世の中のできごとに興味がありますか。	6 9 %	7 5 %
授業で学習したことと世の中のできごとを関連付けて考えることができますか。	5 4 %	6 3 %

* アンケート結果より、1 と 2 を肯定的な回答として、合計した回答数の割合を示している。

資料 1 より、生徒が新聞を読んだり意見を考えたりする活動を学校で取り入れたことで、読解力や表現力が向上したと考える生徒の割合や、様々な社会的事象に対する興味や関心が高まったと感じる生徒の割合が向上した。また、新聞を読み比べることで、一つの出来事に対しても様々な考え方があることに気付いた生徒も多数いた。

5 成果と課題

成果として、生徒アンケートから人前で話したり自分の思いを文章で表現したりすることができる生徒や世の中の出来事に興味を持つ生徒が増えていることが分かった。これは、様々な N I E 活動を通して、情報を読み取ったり、表現したりする活動を行った成果であると考えられる。実際に、授業中に指名されたときに単語でしか答えられなかった生徒が、文章で自分の思いを表現しようとする場面も少しずつ増えてきた。テストにおいても、文章で答える問題の正答率が徐々にではあるが上がりつつある。また、休み時間や昼休みに新聞を読む習慣が身に付いた生徒も複数いた。

課題としては、生徒の表現力を高めるためには、更なる手立ての工夫が必要であることが分かった。特に、新聞に対する感想や視写で見受けられた自分の思いを文章で表現する力を育てていくための取組が必要である。また、効果的な N I E タイムの在り方や、授業の中で計画的に活用していくための各教科の年間計画や単元計画を練り直していく必要がある。今年度に挙げられた課題を基に、より良い N I E 活動を行っていくために、更なる工夫を行っていきたい。

自ら学び、考えを深め、豊かに表現する生徒の育成

松山市立旭中学校／教諭 本田 智珠

1 はじめに

本校は平成2年4月に旧五明中学校と旧伊台中学校が統合して誕生した創立35周年目の学校である。旭中という校名は、太陽の登る松山市の東部に位置することにちなんでいる。豊かな自然に恵まれた中で、183名の生徒が伸び伸びと勉強や学校生活に取り組んでいる。



2 研究の方向性

本校は、教育目標「豊かな心と希望をもってしなやかに生きる生徒の育成」のもと、様々な教育活動に取り組んでいる。また、令和6年度から具体的に伸ばしたい力として「しなやかさ」という言葉を教育目標に加えた。この教育目標実現のための研修方針の一つに「様々な教育活動で新聞を活用する」ことを掲げた。小規模校だからこそ、教科や学年を限定せず、NIEの活動に全員で取り組むことを目標とした。

3 実践事例

(1) 新聞コーナーの設置

日常的に目を通せるよう、生徒・教職員が校内で移動する際に一番通る生徒玄関近くの多目的ホールの一角に新聞コーナーを設置した。展示し終わった新聞の保管もわかりやすく行い、事後の活用がスムーズに行えるようにした。また、暑い時期は扇風機を設置したり、生徒の興味を引きそうな記事を掲示板に掲示したりと、生徒が集まりやすい環境づくりも行った。新聞コーナーの近くには校長先生自らが各紙を読み比べて記事をピックアップした「校長が興味を持った記事」を掲示するコーナーもできた。



(2) ◎スタの活用

1・2年生は週に2回、朝の自主学習の時間を使って◎スタの活用をしてきた。◎スタで新聞記事を読み、気になった記事について感想を書き、ロイロノートで提出するという活動である。ロイロノートの提出箱を共有にすることで友達が気になった記事や友達の感想も目にする事ができ、幅広い話題に触れることができた。また、次の記事探しの意欲にもつながった。

(3) 新聞づくり

ア クミハンを使って

3年生は修学旅行新聞、2年生は職場体験新聞を作成し、作成した新聞を文化祭で展示した。3年生は2年時に作成した経験を生かすとともに、新聞の見出しや構

成を参考にして効率よく作業を進めることができた。2年生は、作成前に愛媛新聞社の方を講師に招き、レイアウト講座を受講し、記事の書き方などのワークショップにも取り組んだ。また、サンプル記事を使って実際にクミハンの操作を行い、職場体験のまとめの活動への見通しを持たせることができた。



イ 手書きで新聞づくり

1年生は、新聞の形式で職業調べ新聞や高校調べ新聞を作成した。見出しや項目をあらかじめ指定し、計画的に端的に新聞の形式にまとめられるようにした。

(4) いっしょに読もう！新聞コンクールへの参加

新聞に親しんでもらおうと、夏休みの課題として「いっしょに読もう！新聞コンクール」への応募をさせた。まず、1学期末の授業で練習し、新聞をとっていない家庭も参加できるようにモニターキャンペーンの案内を行った。また、学校でとっている新聞等を閲覧したり、切り抜いたりできる場所を設置し、なるべく多くの生徒が課題に取り組める環境を整えた。しかし、地域の広報誌を新聞と思って切り抜いてきた生徒もあり、いかに日頃新聞に親しんでいないか実感する状況であった。多くの生徒の提出により、学校奨励賞として表彰されるに至った。

(5) 各教科での取組

ア 国語科での取組

国語科では、「新聞のコラムを読んで文章力を上げよう」という授業実践を行った。新聞のコラムを読み、意味の分からない語句を調べ、要点をまとめ、感想を書かせた。新聞を読む機会が少なく、コラムの存在を知らない生徒も多かったが、活動を進めるうちに、初見では難解に感じた文章も自分なりに



に理解できるようになった生徒が多数いたようだ。授業後の感想には「コラムを要約することで文章力が上がる理由が分かった」「要約するために何度も読み返すうちに、面白い文章だと感じられた」など、手応えを感じた生徒もいた。

イ 社会科での取組

3年生の公民の授業では、株式会社の仕組みを学習した後、株価がどのように変化しているかを実際に新聞の株価のページで確認させた。その後、値上がりしている会社や値下がりしている会社を調べ、経済の動向を確認させた。新聞という生きた教材を使うことで、生徒も興味を持って学習に



取り組めたようだ。

また、1年生の社会科の授業の最初にニュースに関するスピーチを取り入れた。級友のスピーチを聞きながら、世の中の出来事に関心を寄せるとともに、クイズを取り入れたスピーチを行い、表現力の向上に努めた生徒もいた。

ウ 理科での取組

理科では、天気学習の際に、新聞の天気図を活用して説明を行った。新聞の天気図を活用することで、生徒は天気の学習をより身近なものと感じ、意欲的に学習に取り組むことができた。

エ 英語科での取組

英語科では、新聞を活用した宿題を出した。単元の内容に関係する新聞記事を探させた。見つけた記事を写真撮影し、気になる言葉や表現に線を引き、それらの英語表現を調べ、ロイロノートでシートを作成し提出箱に提出させた。

この活動を行うことで、気になる言葉の英語表現を進んで調べたり、視野を広げたりするきっかけとなった。

オ 技術・家庭科での取組

家庭科分野で、3年生は夏休みの課題として「安全対策について」の新聞づくりを行い、文化祭で展示した。2年生は、保育に関わる問題の記事を切り抜き、それを読んで分かったことや気付いたこと・意見を書かせた。

カ 特別支援学級での取組

「新聞を使って防災を考える」という授業実践を行い、新聞を活用して、頭部の保護をするヘルメットの製作を行った。クッション性や保温性を高めるため二重にするなどの工夫をしながら製作を行うことができた。安定性の維持の工夫が必要であるが、スリッパなど避難先でも活用できそうな防災グッズを製作することができることがわかった。

キ 学級活動での取組

「新聞に親しもう」というテーマで、各学級で工夫した実践を行った。クロノリ俳句に挑戦したり、新聞紙面の中で最も大きい数字や級友と同じ名前を探させたり、切り貼りで文を作成させたりした。新聞を取っていない家庭も多い中で、このような活動を行うことで、新聞を身近に感じてもらう機会になったのではないかなと思う。

ク 総合的な学習の時間での取組

2年生の総合的な学習の時間に、日頃行っている◎スタのまとめとしての活動を

Unit5に関連する記事 愛媛新聞11月6日



- | | |
|--|------------------|
| 1 返り咲く regain the rank of selfwake
o comeback | 4 獲得 acquisition |
| 2 投票する voting
to vote | 5 集会 gathering |
| 3 民主党 Democratic Party | |



行った。これまで、自分が選んだニュースの中で一番気になるニュースを選び、班内で発表した後、班の代表者が全体の前で発表した。日頃、書く活動はしているものの、あまり発表する機会はなかったので、改めて自分の考えを見直すとともに、質疑応答を取り入れることで、自分自身の意見をしっかりまとめることができた。



(6) 教科外での取組

ア 保健・福祉委員会での取組

保健・福祉委員が気になった新聞記事を写真に撮り、その感想などを添えたものを掲示したり、感染症情報や保健福祉に関する記事を切り抜き、掲示したりした。また、新聞紙半面の中に「健康」の文字がいくつ見つけれられるか探す活動も行い、掲示物にまとめた。

これらの取組を行うことで情報に敏感になり、感染症対策への意識も高まった。



4 成果と課題

実践1年目の今年度は、様々な活動を試行錯誤しながら行ってきた。研修職員会で、全国大会の情報や資料などを紹介し、できることから実践してもらうように呼びかけたことで、工夫しながら実践にチャレンジした先生が多かったように思う。日頃新聞に触れ合う機会の少なかった生徒たちも様々な教育活動で新聞が活用されることで、知識の幅が広がり、社会や地域のことに目を向ける良いきっかけとなったようだ。

臨場感のある生きた教材である新聞を学校教育でどう効果的に活用するか、どのように組織的に実践を進めて行くかが今後の課題である。新聞活用の可能性や教材化の事例共有を行い、良いものは引継ぐとともに、年度当初のルール作りを行い、2年目の実践につなげたい。

社会への関心を高め、自分の考えを自分の言葉で語ることでできる生徒の育成

～新聞に親しみ、読み取り、視野を広げる～

松野町立松野中学校／教諭 川添 真実

1 はじめに

本校は、愛媛県の西南部、高知県との県境に位置する松野町にある唯一の中学校である。四万十川を構成する支流の一つである広見川や鬼ヶ城山系など、豊かな自然に囲まれた環境にある。全校生徒は63名であり、学年を超えての交流も活発な学校である。

学校教育目標は、「夢に向かって進む生徒を育てる」である。この実現のためには、視野を広く持つことや、学校で学習していることが実社会とつながっているという実感を持つことが大切である。また、社会への関心を高めることや、それに対する自分の見解や意見を、自信を持って堂々と表現できる力も重要である。新聞を活用した学習活動を通して、本校の生徒の課題である読解力や表現力の育成を図るとともに、設定したテーマに迫ることを目標として取組を始めた。

2 研究のねらい

- (1) 新聞に触れる機会を増やし、新聞を身近なものとして親しませる。
- (2) 社会の出来事への関心を高めさせる。
- (3) 新聞記事を読み取る活動を通して読解力を高め、自分の考えを自分の言葉で表現する力を身に付けさせる。

3 本校の取組

(1) 校内の環境整備

ア 新聞の掲示と陳列

生徒玄関から教室までの、生徒がよく通る廊下に各社新聞を陳列した。また、生徒が興味のある新聞記事を切り取り、分野ごとに掲示をして、いつでも誰でも見られるようにした。新聞記事の切取や管理は、生徒会の総務委員会（販売や図書、新聞の管理などを行っている委員会）が担当し、役割分担をして行った。



イ 各教科、委員会の掲示

社会科では、学習内容に関連する新聞記事を掲示した。記事に対する問いを書い

た付箋紙を貼ったり、新聞記事を使って作成したワークシートを掲示したりして、学習内容の定着と深化を図った。

人権委員会では、人権委員が関心を持った新聞記事を掲示し、人権の啓発を行った。初めは記事を掲示するだけだったが、3学期以降は、記事の要約と記事に対する自分の考えを書き、掲示するようにした。



【社会科の掲示】



【人権に関する新聞記事の掲示】



(2) 朝学習での新聞の活用

本校では、朝の会開始までの10分間を、朝読書や朝学習の時間に充てている。その時間帯を有効に活用し、新聞に親しませるため、以下の四つの取組を行った。

ア 「@スタ」の活用

新聞を読み取る力を高めるため、毎週木曜日に生徒のタブレットに配信される「@スタ」の読取問題に取り組ませた。

イ 「速読・読解」の取組

毎週金曜日には、新聞のコラム欄を読み、語句の意味調べや感想を書く活動を行った。

これまで、コラム欄の文章を書き写す「視写」を行っていたが、今年度は語彙力と読解力の向上を目指し、このような形式に変更した。

ウ 「新聞をじっくり読む」時間の設定

11月より、毎週水曜日は、新聞を一人一部ずつ配付し、「新聞をじっくり読む」活動を取り入れた。新聞の掲示や陳列だけでは、時間をかけて記事を読む生徒が少ないと感じたからである。生徒にはシールも配付し、自分が気になった記事にシールを貼らせるようにした。次にその新聞を読んだ生徒が、友達の気になった記事を目にし、自分にはなかった視点で記事を見付け、読むことができた。

エ 朝の会での1分間スピーチ

自分の気になった新聞記事の内容や、自分が考えたことを分かりやすく相手に伝える力を身に付けさせるために、1分間スピーチを行った。



感じたことや気付いたことを書こう。必ず3行は書きましょう。

み風呂でマヨネーズを使うのが流行り前というのに、クリーム
た 中村氏がSNSを使うのが流行り前というのに、クリーム
うことになりうた。



まず、ワークシートを用い、「いつ」「だれが」「どこで」「何を」などの内容を抜き出させ、内容を丁寧に読み取らせた。そして、「記事のどんなところが気になったか」「みんなとどのようなことを共有したいか」など、自分の考えを書き、1分間スピーチで発表させた。

(3) 各教科での新聞活用の取組

各教科でも、学習内容と新聞記事とを関連付けるなどして、新聞を授業で積極的に活用した。

ア 社会科での実践

(4) 憲法に反する法律をどうするかについて。

①右の新聞の「違憲」とはどういう意味ですか？

②どんな法律を「違憲」だと言っているのですか？

③ ②の法律は憲法第13条の何権に反しているのですか？ 権

④このように、全ての法律、命令、規則、処分が憲法に違反していないかどうかを判断する権利を何と言いますか？ 権

⑤なかでも最高裁判所は、違憲審査についての最終的な決定権を持つことになるので、何とされていますか？

【違憲審査権とは何だろう】

新聞で知識を定着させよう！ 教p.88「国会の地位としくみ」に関連して 3年（ ）



- (1)記事から抜き出そう。
- ①衆参両院が議論するのはどんなことですか？
国政の
- ②左右対称に並んでいる建物は何ですか？
- (2)参議院が「良議の府」(良政に基づき、中立で公正な審議をする)と呼ばれる理由は何ですか？
被選挙権が 歳以上で、任期が 年であり、解散が ので、時間をかけて公正に審議できると考えられているから。
- (3)衆議院が優越している権限は何ですか？本文から2つ抜き出そう。
 先議、 指名

【国会の地位としくみについて振り返ろう】

社会科の学習内容が、自分の生活とはかけ離れたものではないことを実感させるため、具体的な事例（記事）を通して学習を行った。例えば、違憲判決の記事を読み取らせ、「違憲審査権とは何か」「なぜ裁判所がこのような権利を持っているのか」について考えさせた。ワークシートの問いには、教科書で調べなければ分からないものもあるため、教科書の文章をより注意深く読む生徒が増えた。

さらに、学習したことを定着させるためのワークシートも、新聞記事を活用して作成した。「国会の地位としくみ」の学習の後、新聞記事から、衆議院の優越の内容や衆議院と参議院の違いについて読み取らせ、学習内容の定着を図った。

右は、生徒の感想である。
生徒は、教科書の語句を単に暗記するのではなく、教科書の内容と社会の出来事とを関連付けることで、リアリティーを伴って学習することができた。

イ 家庭科での実践

3年家庭科「幼児のおやつ作り」の授業で、「幼児の誤えん」に関する新聞記事を活用した。

【生徒の感想】

- ・読解力が上がった。
- ・知らなかった政治のことを知ることができた。
- ・社会の出来事について知ることができた。
- ・様々な知識を身に付けることができた。
- ・新しい言葉を知ることができた。
- ・字を読むことが好きになった。

【授業の流れ（生徒の学習活動）】

- ①「幼児の誤えん」に関する新聞記事から、「幼児がのどに詰めやすい食べ物」の特徴をつかむ。
- ②「幼児が安全に食べられる野菜蒸しパンの調理方法」について班で考える。
- ③班で考えた調理方法で実際に野菜蒸しパンを作る。
- ④各班が作った野菜蒸しパンを試食し、相互評価する。
- ⑤保育園の栄養士のインタビュー動画を視聴し、幼児の誤えんを防ぐ調理法の工夫について理解する。
- ⑥授業で学んだことをまとめる。

新聞記事を読み取ることで、生徒は、「幼児がのどに詰めやすい食べ物」の特徴を押さえた上で、様々な工夫をして調理することができた。野菜をみじん切りにする班、すりつぶす班、最初に蒸す班など、各班で違いが生まれ、主体的で対話的な学習活動になった。また、「なぜその調理方法で調理したか」について、新聞記事で読み取ったことを根拠に説明するなど、論理的に考え表現することができた。



4 成果と課題

(1) 成果

【新聞を使った学習活動をして良かったこと】（生徒アンケートより）

- ・内容を理解する力が付いた。
- ・新聞記事を読み取って皆に伝える力が付いた。
- ・語彙を増やすことができた。
- ・一つのことに深く考えて、それを分かりやすく伝えることができた。
- ・社会のことを知ることができた。
- ・普段の学校生活で習わないことから学ぶことができた。

新聞を学習活動に取り入れることで、読解力や語彙力が増えたと実感する生徒が増えた。また、「新聞を読むことで、社会の出来事を知ることができる」と答えた生徒が84.9%、「学校で学習していることは実社会とつながっている」と答えた生徒が90.6%であった。この結果から、NIE教育の実践により、生徒が社会の出来事への関心を高め、学習の有用性を実感することができたと考えられる。

(2) 課題

今年度の実践は、NIE教育担当や特定の教科・学年に偏った。今後は、総合的な学習の時間や委員会活動などで新聞を取り入れた学習活動を行うなど、実践の柱となる取組を考え、全校・全教職員でNIE教育に取り組む体制を整えたい。また、各社新聞を読み比べたり、多様な分野の記事を読んだりすることで、生徒が自分の意見を形成し、表現する力を身に付けられるよう工夫したい。

「N I E活動を通して行う生徒と地域の未来づくり」

～読み取る力・判断する力・表現する力・ふるさとを愛する思いの育成を目指して～

松山市立久谷中学校／教諭 灘野 裕子

1 はじめに

本校は、松山市最南部の郊外に位置する全校生徒250名の公立中学校である。本校は、長い歴史と多くの文化財を有する自然豊かな地域に立地し、伝統を大切にする「まち」の中心として、地域や家庭の協力を得て、教育活動に取り組んでいる。校区には四国八十八カ所の札所が二つあり、「お接待」の文化の根付く地域で長年「奉仕」の心を育む努力をしてきた。このような環境の中で生活する本校生徒は、大変素朴で素直であり、「自立・協力・奉仕」の校訓のもと、諸活動に真面目に取り組んでいる。

2 研究のねらい

- (1) N I E活動を通して、読み取る力・判断する力・表現する力を育成する。
- (2) 指定校4年目を迎え、来年度から指定校ではなくなる現状の中で、来年度も続けられるN I E活動を探る。

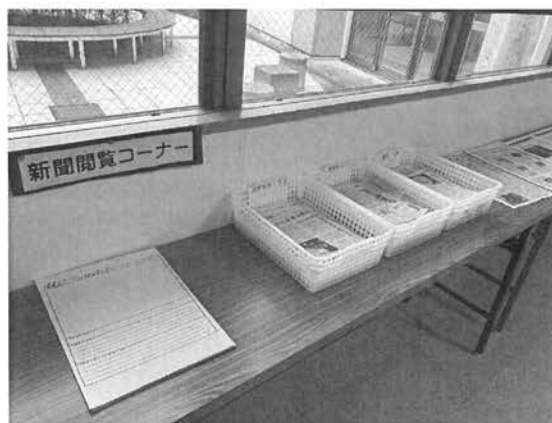
3 本校の取組

- (1) N I E委員会（生徒組織）の立ち上げ
- (2) N I Eコーナー（新聞閲覧コーナー）の設置

本校では、生徒玄関のフロアに新聞閲覧コーナーを設置している。また、各学年から公募したN I E委員会のメンバーが新聞スクラップを行い、それを生徒玄関のフロアのN I Eコーナーにジャンルごとに分けて置いている。新聞購読率の減少にともない、家から新聞記事を持ってくるできない生徒も多く、昼休みには、新聞記事コーナーで新聞記事を選ぶ生徒がよく見られた。



【新聞閲覧コーナー】



【新聞記事コーナー】

- (3) 新聞記事スピーチの実施

新聞記事コーナーの新聞記事を活用して、毎朝1分間スピーチを行った。スピーチ

内容は、自由としており、地域の現状・国際社会・教育問題・スポーツなど多岐にわたっている。スピーチ後、そのワークシートを各学年の廊下に掲示して、共有化を図った。スピーチの回数を重ねるごとに、記事の内容や発表の表現力が高まっていると感じている。

新聞記事スピーチを通して、現代社会の問題について知り、興味を抱く生徒は多く、この活動は継続していきたいと考える。



【ワークシートの掲示】

(4) N I Eタイム（「@スタ」を活用して新聞記事を読む時間）の実施

毎週金曜日の朝自習の時間を活用し、愛媛新聞forスタディ（@スタ）のニュース記事を読んでいる。そして、気になる記事を切り取り、感想を書いて、ロイロノートに蓄積している。「@スタ」には、毎日新しい記事が配信されるため、この活動も現代社会の動向を知るために有意義であった。



【N I Eタイム】

【内容】 少子高齢化が進んで過疎化問題が深刻化している地域が日本では増えている。
その中の1つが愛媛県内子町五十崎地域である。この地域の運動会では綱引きやリレーなどの定番種目を行わず、モルックやポッチャなどの軽スポーツ中心の大会にして老若男女問わず楽しめるような大会にしているという。

【感想】
過疎化が進んでいる都市はたくさんあるので、このように時代の変化に合わせて今までしてきたことを変えることはいいと思います。久谷も昔に比べて過疎化が進んで来ていてこのままいくとこのような地域の仲間入りをしたいと思います。そんなことにならないように対策していくのが大事だと思った。



【ロイロノートに蓄積しているレポート】

(5) デジタル新聞づくり（新聞作成ソフトを用いた新聞づくり）

本校は、愛媛新聞社による新聞づくりの出前講座を活用して、デジタル端末で新聞づくりにチャレンジしている。令和4年度からデジタル新聞づくりにチャレンジし、令和5年度は、「クミハン」を活用して2年生の職場体験学習についての新聞、3年生の修学旅行、夏休みの思い出についての新聞を作成した。そして、優秀な作品は、愛媛新聞中学生クミハン新聞コンクールに出品した。令和6年度も愛媛新聞中学生クミハン新聞コンクールに出品し、2年連続学校賞を受賞した。

「クミハン」を活用した新聞づくりは、仕上がった作品の見た目が美しく、作成も簡単なので生徒から好評である。来年度は、1年生の地域巡りについて「クミハン」で新聞にまとめさせたいと考えている。



【新聞づくりの出前講座】



【「クミハン」によるデジタル新聞づくり】

(6) シンプリオバトルの実施

毎日やってきた新聞記事スピーチから自分が最も伝えたい記事を選び、学級で代表を決定し、文化祭で各学級の代表1人がステージで発表した。3年目となる実施であり、年々表現力の向上を感じることができた。新聞記事の選び方、意見のまとめ方、発表の仕方がすばらしく、見ている生徒の表現力の向上につながると感じた。



【シンプリオバトルで発表する生徒】

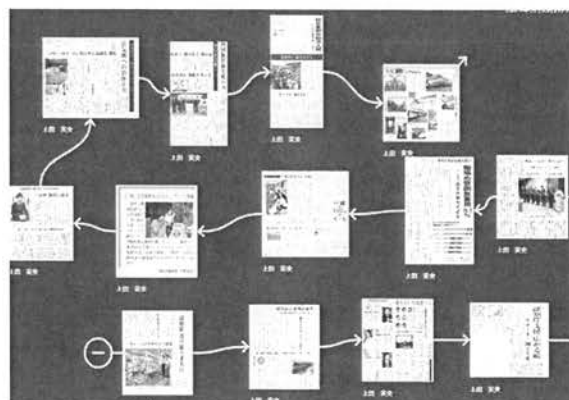
(7) デジタルスクラップの実施

令和4年度は、2年生でSDGsについてのテーマに沿って、「@スタ」と「朝日ジュニア新聞」から記事を検索し、令和5年度は、3年生で地域活性化についてのテーマに沿って、「@スタ」と「朝日新聞けんさくくん」から記事を検索して、デジタルスクラップを作成した。

今年度は、「@スタ」から記事を検索して、デジタルスクラップを作成した。2年生でSDGsについての記事をテーマごとに調べ、自分のデジタル端末に記事をスクラップしていった。2時間くらいの学習で15枚程度の関連記事をスクラップすることができた。その記事を読み込み、必要な記事を選択していった。



【デジタルスクラップによる学習の手順】



【個人のデジタルスクラップ】

(8) 切り抜き新聞の作成

デジタルスクラップした記事からSDGsのテーマごとの「現状」と「課題」「解決策」を選択し、切り抜き新聞を作成した。切り抜き新聞を作成するとき、「現状」と「課題」「解決策」が可視化できるように配置を工夫することができた。そして、切り抜き新聞をもとに、「2030年までにSDGsは実行可能か」「SDGsの対策は進んでいるか」を考え、発表を行った。



【SDGsの学習で作成した切り抜き新聞づくりと発表会】

4 成果と課題

(成果)

- ・4年目の取組のため、先生方の理解があり、スムーズに活動することができた。先生方がNIE活動の効果を実感し、来年度もぜひ継続したいという意見であった。
- ・新聞が当たり前で閲覧できる環境、新聞記事が当たり前で検索できる環境があることで、NIE活動は継続することができる。そして、新聞スピーチやNIEタイムの継続によって、生徒が社会的事象に触れることができ、中学校の3年間で継続していくことで、生徒の読み取る力・判断する力・表現する力は確実に向上すると考えられる。
- ・「クミハン」による新聞づくりやシンブリオバトルなどは、学年が上がるごとにレベルが上がった。そのためには、表現する機会の設定と共有化し合う機会の設定が大切であると考えられる。「@スタ」による記事の検索は、教科や総合的な学習の時間など全ての場面で有効であり、工夫次第では、今後様々な実践が可能である。

(課題)

- ・来年度から新聞がない状態で継続できるか、担当者が変わっても継続可能か、NIE活動の継続への教職員の理解が得られるかなどの課題が考えられる。

持続可能な社会の実現に貢献する実践者の育成に向けたNIEの推進

愛媛大学教育学部附属中学校／主幹教諭 富永 剛志

1 今年度の取組

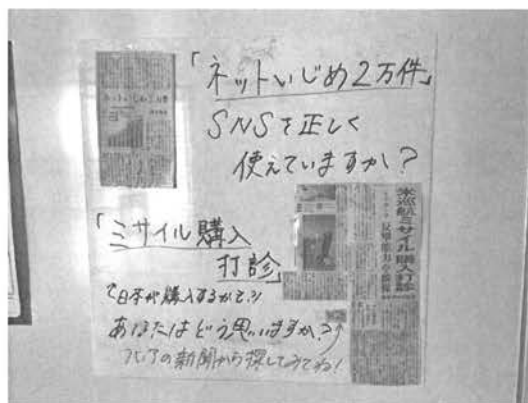
附属中学校が目指している生徒の姿は以下のとおりである。

- 自ら課題を見いだす
- 課題を自分ごととして捉え、教科の学びを基に実践の場で活用する
- 学びを多様な他者との関わりの中で発揮していく

この姿のうち、今年度は下線部の生徒の姿をゴールにして、これまで取り組んできた活動を全体の取組や教科の取組に広げた。

(1) 新聞記事に触れる（生徒会活動）

生徒会活動の一環として、学習委員会が毎朝新聞を掲示した。1面、社会面、地方面の3ページを壁面に掲示し、残りは机上で閲覧できるようにした。この活動は3年間で徐々に各学級におけるNIE活動に広がり、各クラスで自主的に新聞の切り抜きから学級内で話題を提供するようになった。このことは、生徒が記事「と」つながり、記事「で」つながるよい機会となった。



(2) 教科の授業で触れる（2年数学科での取組事例）

1月に行った数学科の授業では、「愛媛新聞forスタディ(©スタ)」を活用し、身近な事象や社会の「不確定な」事象において、興味のある記事を探した。



○「県内初の電動ストレッチャーなど装備 八幡浜消防が新型救急車を運用開始」→各地における、救急車の到着時間はどうなっているのだろう？

○「新田高（松山）にファミマ出店 四国初、全国6校目」→地区によってある商品の売れ行きにどんな特徴があるのだろうか？

2 4年間の学びを振り返って

【三者の視点に立って記事を読み考える (©スタを活用して)】

「三者」がつながる活動(オンライン会議)

※NIE週間の取組を生かして質問

調べる人

伝える人

読む人

どんなことを
伝えたくて
調べたのか

どんなことを
知ってほしいと
伝えたのか

どんなことを
記事から読み取り
考えたのか

「私」はどの立場
にもなり得る



① 記事の見出し 中々ロビースの仲間、温暖化防止生態系がバカ

②取材された人は、どのような思いで、何を変えたかったのか
私たち人間は省エネに気を付けなければなりませんが、
身近に公園にいる沢山の動物たちも絶滅している。
人間と動物は常に支えあっているという深い関係。

③取材した人は、なぜその記事を取り上げたのか、どのように伝えたかったのか
私たちは「地球温暖化を防ぐため」と言っていますが、
実際には私たちに直接影響があるわけではありません。
ので、そのような機会を設けている団体がいる。
(角れのある場所)があること

④読み手としての「自分」は、自分の経験と重ねて、どのようなことを考えたのか
私は、地球温暖化が進んでしまうと、食糧不足が
起るかもしれない。ライオンや虎が絶滅してしまうのではないかと
思っていました。しかし、動物全体はサイタルが
止まってしまうことが今日よりさらに分かります。
今から自分にできることを考え、生活習慣を変える
中にも同じような考えを出していただければ。

◎スタ「ニュース学習帳」の記事に取り上げられた取材対象者、執筆した記者をゲストティーチャーとして授業に招き、それぞれの思いを聞き考える取組を行った。



- 自分の考えを多様な視点から根拠を持って主張する生徒が増えた。
- 課題を自分ごととして捉え、自ら問題解決に向かおうとする姿が見られた。
- 取材対象者や記者との出会いを通して、生徒は相手の思いや考え、立場を深く理解し、「世の中で起きていることには、人の思いが込められている」ことを実感し、よりよい生活を思い描き実行していこうとする意欲の高まりが見られた。

グループ A

「記者」の視点に立ってGTの方に聞きたいことは？



- ・記事を取材しようとした理由はなにか
- ・なぜ最後、坪田会長の言葉を書いたのか。またそれによってどんな効果があるとおもったか
- ・命の大切さ、と書かれていたが、どういう意味か。また、命の大切さをどのように考えているか。
- ・ご縁を繋ぐという意味

どのような思いで聞いたのか

記事を読む限り、命の大切さというのがキーワードになっていると思うが、そこに込められた意味をしりたいから。

【活動を振り返って考えたこと】

ゲストティーチャーの方と話してみても、活動の素晴らしさとともに、大きな活動をするにあたっての様々なきっかけ、色々な出会い、逆に困難などたくさんあったことがわかりました。私は探求で貧困の子どもたちを助けるにはという課題で行っていましたが、支援の方法や、現状の広め方などはわかったものの、一体どう活動したらいいのか、結局ゴールは何なのかわからなくなり混乱していました。しかし今回の授業で、それは今からたくさんの方のきっかけによってわかっていくことで、それにゴールはないことがわかり安心しました。社会の役に立つための一歩を、この授業を介して教えていただき本当にいい機会が得られたと実感しています。



「取材対象者」の視点に立ってGTの方に聞きたいことは？



- ・活動をしようとした理由
- ・活動によって得たもの
- ・活動する上で大変だったこと
- ・犬など、種類を超えた者同士で心は通じ合うと思うか
- ・活動しようとした時の目標とは、またそれは達成できたのか
- ・命の大切さについて
- ・ご縁を繋ぐとは具体的にどういうことか。

どのような思いで聞いたのか

自分はまだ総合の課題で設定したことの知識は得られたが、解決するために行動することができていないことが悩みだから。

この4年間を通して一貫して掲げた工夫が「つながる」ことであつたが、各種取組を通して育った生徒の姿から、新聞を通して出来事と「つながる」、相手と「つながる」、自分自身と「つながる」ことの大きな可能性を確信することができた。

これらの成果をもとに、これまでに取り組んできた、人とつながるための「取材対象者・書き手・読み手」がつながるような機会を設けることで、さらにその出来事や人物、ひいてはその人の生き方に触れ、持続可能な社会の実現に貢献する実践者としての意識を高めたり、実践へのきっかけにしたりしていくことにつなげたい。

最後に、この4年間で生徒が成長することができたのは、多くのご支援をいただき、挑戦的な取組を後押ししていただいた愛媛新聞社の皆様、共に研究を進めてきた発表者の先生方のご尽力に他ならない。感謝申し上げます。



新聞を用いた総合的な学習の時間の授業実践

～小論文指導につなげる新聞活用～

愛光中学・高等学校／教諭 小澤 矩彦

1 はじめに

昨今教育の現場において変革が求められている。それは「Society 5.0」をはじめとした「情報化社会」の進展、また転々とする世界において、受身に構えるのではなく、主体性を持って問題解決に当たることの出来る生徒を育みたいなど様々な背景を背負って立ち現れているが、しかし昨今の教育実践の中には、そのような背景を忘れてしまっているようなものが少なくないように思われる。例えばタブレットの活用はある能力（情報運用能力等）を育むための手段としてあったはずだが、今日はタブレットを使うことそれ自体が目的と化し、タブレットを使っているものの、なぜタブレットという手段を用いているのか、それを用いて達成したかったことが何なのかが分からなくなっているような実践を目にすることが増えたように感じる。もちろんタブレットを用いることを否定したいわけではない。しかし、タブレットを使っていればそれは良い授業である、とすることには違和感を覚える。

今回は校長からのお話を頂き、新聞を用いた教育実践の報告を行う機会を得た。以下それについて報告していくが、実践者が持つ上記の問題意識を踏まえ、新聞を用いることそれ自体を目的とするのではなく、ある能力の育成に際し、なぜ新聞は有効なのかを示すという観点に基づき、実践をした。このような報告を書くこと自体が初めての経験であり、お見苦しいところもあると思われるが、ぜひご指導ご鞭撻のほどお願いしたい。

2 授業の目的

私が勤務する愛光学園は、大学進学を志す生徒がほとんどの学校である。そのため、授業においては、もちろん指導要領上の必須事項は満たしつつ、かつ大学入試に求められる能力の育成を目標とすべきである。そのように考えた時、いわゆる一般入試における各受験科目については、それぞれの科目担当者が指導をしている。よって私が担当する中3「総合」という科目においてなすべきは、そこでは対応しきれない部分、今回は総合型選抜における入試対策であると考えた。昨今は総合型選抜を実施する大学も増えているようであるから、それへの対策は生徒にとっても有用であろう。総合型選抜における課題もいくらかあるが、本実践では、自身が国語科の教員であることもあり、小論文の書き方への指導を目標とすることにした。より細分化するのであれば、①世の中で起こっている事柄について、知識のストックを増やしていくこと、②小論文の書き方を学ぶこと、の二点を、授業の目標として設定した。

さて、以上のような目標の達成を考えた時、教材として新聞記事を用いることは極めて有用である。なぜなら、①について、新聞においては様々なジャンルの時事問題が紹介されているうえ、そのリアルタイム性が大きな長所としてあるためである。自身が担当する国語の授業においても、評論文で用いられている教材は、比較的新しいと言えど

も、現在進行形で起こっていることとはずれがある場合が少なくなく、特に昨今のように、目まぐるしく変化する時代においてはそれが顕著である。そのため、リアルタイム性を持つ新聞記事を用いて授業を行うことで、生徒もより身近な話題として題材を感じ、興味関心を持って自身の知識のストックとして蓄え、また主体的に情報を収集する姿勢が身に付くように思われる。それならSNSでも良いかという意見があるかもしれないが、昨今SNSにおいてはフェイクニュース等、誰でも情報が発信できるからこそ、発信されている情報の真偽の判断が難しいという話をよく耳にする。もちろん新聞記事も人の手を介した情報発信である以上、いついかなる時も問題がないとは言えないが、そもそも人が情報を発信する際に、それを0にすることはできない。その中でも、社名を背負い、取材を元に情報を発信している新聞記事は、SNSにおいて匿名の個人が発信している情報よりは情報の信憑性が高いように思われる。生徒に信憑性が高い情報に触れてもらうという観点に立ったとき、やはり新聞記事を用いることには価値がある。合わせて、SNSではフィルターバブル効果に代表されるように、自身の興味のある記事しか目に付きにくいのが、新聞においては、今興味がないものを目にし、新たな世界に触れる契機となりうるという長所もあり、まさにこれは知識のストックを増やすという観点に際し、有用な長所である。また②についても、新聞記事は公的に、そして長すぎない分量で書かれているため、その書かれ方の分析をすることで、ある程度まとまった長さの文章の書き方を理解することが出来ると考えた。

以上の理由より、本実践においては新聞記事を用いることが適していると判断し、それを用いていくこととした。

3 授業の方法

本実践において行った活動は大きく三つある。

①新聞を用いたプリントを用いて、時事問題についての理解を深める。

②小論文の書き方について理解する。

③新聞を読める場を提供する。

以下それぞれについて説明する。

①について、「総合的な学習の時間」において、一枚、あるいは複数の新聞記事を選定し、それにこちらが設定した設問を付けたプリントを作成し、授業を行った。例えば「BeRealの流行」を紹介した記事を用いて、現代の若者の嗜好について考えたり、「AIが短歌を詠む」ことを紹介した記事を用いて、実際に生成AIにて短歌を作成し、生徒が作成したものと比較し、AIが作る短歌、ひいてはAIが生成するものの特徴について考えたり、「長持ち支援」として、製品を長く使えるようにするためのメーカーの工夫を紹介した記事を用いて、大量生産・大量消費型の社会の問題点について考えるなど、新聞記事を題材として、現代社会のあり方について考えられるような授業づくりを目指した。また生徒に定期的に「時事問題調べ」と題して、配布したプリントに自分が気に入った新聞記事を貼り、感想を書いて提出するという課題も行い、可能な限りその中から題材を選ぶことによって、生徒の学習意欲の向上に努めた。

②について、①とも関連するが、上記のプリント作成に際し、自身の意見を述べるようなタイプの問題を設定し、生徒に書かせて、それをロイロノートで共有し、自分

の意見を深めるという活動も行った（下写真1）。その際に、所謂一般的な小論文の書き方の大枠を提示したり、また新聞の書かれ方に注目することで、どのような構成で文章を書いていけば、読みやすい文章になるかなども考えた。

③について、これも同じく①の内容と関連するが、近年の新聞購読率の低下や、特に本校は寮のある学校であり、生徒が等しく新聞に触れる機会がないということから、学年の共有スペースにて、新聞を置いておき、生徒が日常的に新聞を手にすることが出来るような環境を整備した（下写真2参照）。

（写真1）



（写真2）



2024年11月9日付 愛媛新聞より

4 授業の成果と課題

授業の成果として、まず生徒の感想を示し、その後に私の感想と課題を述べる。

まず生徒の感想を、上記の活動①、②、③のそれぞれに分けていくつか示す（本稿作成にあたり、一部表記を改めた）。

①について

- ・今までは新聞を読む機会が少なかったが、この授業でじっくり読むことができそれに関連して気づいたことを書き出してみる、ということで自分自身の視点が広がったように思う。
- ・現代社会に蔓延る様々な問題を複数の着眼点から話し合うことでこれからの世の中を背負っていく世代としての自覚を得ることができたと思う。

- ・新聞記事を読んで、その後関係する資料も絡めて読むことで社会問題や現象について深く考えることができ、良い学びに繋がったと思いました。自ら進んで考える類のものではない問題についても知ることができました。
- ・総合の授業では大学などで使うものではなく社会で生きていくために欲しい知識として存在しておりどのような課題があるのかやその解決を考えたりすることで社会を学び、最近の大学受験で必要な思考力が養われる。

②について

- ・二学期の総合は元にする記事から自分で小論文をしっかりと字数をかけるようにして形にしようというのがテーマに感じた。自分は小論文を書くのが苦手だが、授業で書き方や構成を学び、そこそこ書けるようになった。
- ・人に伝えやすい文章の構成を学び、授業で実際に文章を書いたことで、どのような構成にすると相手に伝えられるのかが理解でき、今後も使っていけそうだなと感じました。
- ・文の構造や表現方法を学ぶことで、スラスラと文が書けるようになりました。今まで作文を書けと言われると嫌だったが、スラスラ書けるようになり嫌ではなくなりました。

③について

- ・新聞を実際に読むことによって時事に興味を持ちニュースを見るようになりました。
- ・今まで、新聞やニュースなどは、見たり読んだりして「ふーん」とただ情報を享受するだけであったけれど、本授業で行なったそれら(新聞やニュースなど)を吟味・咀嚼して、自分の思った・考えた事を上手くアウトプットし、さらにそれを近くのクラスメイト達と共有するというなんてしたことがなかったのでとても新鮮だった。

もちろんアンケートという形式である以上の付度はあるだろうが、それにしても、こちらの目標が伝わっていた生徒が多かったのは喜ばしいことである。また実際に授業をしていて、学期当初は読む・書くといった箇所では時間が例年より長くかかるように感じていたが、二学期中頃からはそれらの作業に慣れてきたのか、大分速くできるようになったと感じた。本実践はそういった形でも、生徒に寄与するものであったと考えられる。

さて、本実践は中学三年生を対象として行ったものであり、この結果として進学実績にどのような影響があったかを判断するには、もうしばらくの時間がかかる。しかし上記の生徒の感想を見ても、ある程度それに資する授業実践が行えたように思う。これをもって、進学に重きを置く学校においても、新聞記事を用いた授業実践を行う価値は示すことができたのではないだろうか。今年度の反省点は、この実践報告が主に私一人の実践報告になっており、学年または学校全体の取り組みとは言えない点である。しかし、本校における新聞記事活用の可能性は提示できたように思うので、次年度はそれを元に、新聞記事活用の動きを、私個人ではなく、より広げていくことで、また新しい可能性を提示できるように努めていきたいと思う。

思考力・判断力・表現力を育む新聞を活用した活動実践

愛媛県立新居浜西高等学校／教諭 大熊 峻矢

1 はじめに

本校は、穏やかな瀬戸内海と稜線の美しい赤石山系に囲まれた新居浜平野の中心部に位置する全校生徒約800人の進学校である。また、今年度は創立107年を迎える伝統校でもある。校訓は、「自立生活（徳）」、「自主学习（知）」、「自己鍛錬（体）」を掲げ、生徒が主体性を持って、学業だけでなく部活動にも熱心に取り組み、文武両道を実現しようと努めている。今年度は、東京大学をはじめ、京都大学などの難関校に合格する生徒や、部活動では全国大会に出場、また全国優勝を果たした生徒が在籍するなど、輝かしい成績を残している。

2 取組のねらい

現代の社会では、AIやIoT、ロボットなどの先進技術の台頭によりSociety 5.0の時代へ突入するといわれている。そのように時代が移り変わろうとしているなか、少子高齢化問題や環境問題などの社会問題の複雑化、新学習指導要領改訂に伴う大学入試共通テストの再編、総合型選抜入試など入試制度の多様化など、社会情勢は大きく変動している状況である。また、これからの社会がどうなるのか予測困難な状況にもなっている。これからの社会を担う子どもたちは、このような社会でどのように生きていくかを考え、どのようにして社会問題を解決していくかを考えていく力が必要になってくる。これらの問題意識から、社会を見つめる、解決策を考える思考力、選択する判断力、他者に伝える表現力などが、今後は更に大切になってくるのではないかと考えた。したがって、本研究では「思考力・判断力・表現力」を育成するNIEを目標として定め、学校生活全般において活用し、活動実践を紹介する。

3 本校のNIE活動実践

(1) 校内の環境整備

ア NIEコーナーの設置

全校生徒がいつでも新聞を読めるようにNIEコーナーを設置した。

イ 新聞検索スペースの設置

進路探究や総合的な探究の時間で活用できるように、各社ごとに過去の新聞を検索するスペースを設置した。



(2) SHRでの活用

SHRでは新聞を読み、社会情勢を知るだけでなく、新聞のタイトルや文章を穴抜きにして、ここに入る言葉を考察させるなど、多様な活用実践が見られた。

(3) 進路探究や総合的な探究の時間「仰」での活用

大学入試における面接対策や探究活動において、活動目的に関連する記事を調べたり、記事を切り取ってまとめたりするなど多くの生徒が活用した。

4 本校のNIE授業実践

(1) 2年生：教科「国語科」科目「論理国語」の授業実践例

単元「科学・技術の歴史の中での社会」（『論理国語』数研出版）

ア 単元の目的

高等学校学習指導要領解説国語編の「思考力、判断力、表現力」の観点には、「設定した題材に関連する複数の文章や資料を基に、必要な情報を関連付けて自分の考えを広げたり深めたりすること」とある。⁽¹⁾教材の内容は、科学・技術の歴史と社会との関わりについて論じたものである。現代の科学研究が、実際に、社会からどのような評価を受け、また、どのように影響を与えているのかを知り、現代の課題について考察を深めるために新聞を活用した。

イ 単元の展開

本単元の目標を「筆者の主張とその前提や反証など、情報と情報の関係について理解を深めることができるようにする」（知識及び技能）、「『読むこと』において、文章の構成や論理の展開、表現の仕方について、書き手の意図との関係において多面的・多角的な視点から評価することができるようにする」（思考力、判断力、表現力等）、「筆者の主張を理解した上で自分の考えを深め、学習課題に沿って話し合いに参加する態度を養う」（学びに向かう力、人間性等）と設定し、単元の実践を行った（全五時間構成）。第一段階は、筆者の主張を読み取る学習活動である。（第一時～第三時）。第二段階は、第一段階の主張を理解した上で、本文と関連する実社会の事象について考えを深める学習活動である。班を設定し、それぞれの班が選んだ分野における現代の科学研究について、新聞記事を元に調べて発表資料を作成する（第四時）。そして、作成した資料の発表及び協議を行う（第五時）。その際に、ニュースの価値も考察させ、科学と一般社会との間に絆が生じたことの正と負の側面について、協議と発表をさせる。

ウ 単元の成果と課題

自分たちが調べた最近の科学研究が、どのような価値があると判断され、ニュースとして新聞に掲載されているのかを考察する中で、筆者の述べている科学技術の歴史と社会との関係性について、より現実的に捉え直すことができた。また、それらが社会に与える正負の影響の可能性について協議することで、自分たちが今後実際に向き合っていかなければならないだろう問題について、考えを深めることができた。課題としては、今回、生徒には、複数の紙面のストックから自分たちが選んだカテゴリーに合う記事を探してもらった。限られた紙面にニュースとして掲載さ



れた価値がそこにはあるはずだが、生徒たちが限られた時間の中で自分たちの求める情報を得ようとするとき、インターネットの検索機能に頼ろうとするのが普通だろう。無尽蔵にあるインターネット上の情報に頼らない、新聞をはじめとする、編集や校正を経た刊行物に触れる機会を増やすことそのものが課題と言える。

(2) 3年生：教科「公民科」科目「政治・経済」の授業実践例

単元「政党政治と選挙」（『高等学校 政治・経済』第一学習社）

ア 単元の目的

高等学校学習指導要領解説公民編の「思考力、判断力、表現力」の観点には、「政党政治や選挙などの観点から、望ましい政治の在り方及び主権者としての政治参加の在り方について多面的・多角的に考察、構想し、表現すること」⁽²⁾とある。これらの観点を、社会情勢の解説に優れ、信憑性の高い新聞を用いることでより生徒が多面的・多角的に考察、構想し、表現できると考えた。本単元開発では、18歳を迎え、成人となって選挙に参加できるようになる三年生が、望ましい政治の在り方及び主権者としての政治参加の在り方を、新聞を用いて思考力、判断力、表現力を身に付けることを目的とする。

イ 単元の展開

本単元の目標を「現代日本の政治・経済に関する諸資料から、課題の解決に向けて考察、構想する際に必要な情報を適切かつ効果的に収集し、読み取る」（知識及び技能）、「政党政治や選挙などの観点から、望ましい政治の在り方及び主権者としての政治参加の在り方について多面的・多角的に考察、構想し、表現する」（思考力、判断力、表現力等）、「よりよい社会の実現のために現実社会の諸課題を主体的に解決しようとしている」（学びに向かう力、人間性等）と設定し、単元の実践を行った（全七時間構成）。第一段階は、政党の意義と役割や日本の選挙制度の特徴と課題を理解する学習活動である。（第一時～第四時）。まず、政党の意義と役割を理解させ、課題を考察させる（第一時）。次に、日本の選挙制度の仕組みを理解させる（第二時）。その上で、日本の選挙制度の課題や世論の意見を反映させるためにはどうすれば良いのか考察させる（第三～四時）。第二段階は、第一段階の課題を理解した上で、望ましい政治の在り方及び主権者としての政治参加の在り方について多面的・多角的に考察、構想し、表現する活動である。まず、昨年実施された衆議院議員選挙を前に、どのように候補者の情報を手に入れるかアンケートを行い、それぞれの媒体のメリット・デメリットを考察する（第五時）。次に、選挙報道の解説に優れ、信憑性の高い新聞を用いて、生徒自身が選挙の際に何を基準として候補者を選ぶのか、数社の新聞を見比べて情報を収集し、読み取らせ、考察させる（第五時）。最後に、世論形成に大きな影響を与えるマス・メディアの役割を理解させ、今後の新聞の在り方をプチディベートさせる（第六～七時）。



ウ 単元の成果と課題

本単元終了後、生徒に振り返りを実施した。「それぞれの新聞社で着目してほしい点が異なっていて（A社は教育、B社は夫婦別姓など）様々な視点から考えることができた」、「社会情勢が現在どうなっているのか、分かりやすく解説してくれていたのも、選挙の際に何を基準にして投票しようか考えることができた」など、新聞を活用することで思考力・判断力・表現力を深めることができたと思う。しかし、「デジタル化が進んで、紙で文字を読む機会が私の生活の中ではほとんど無かったので、読むのが大変だった」などの否定的な意見も見られた。実際、家庭で新聞を購読していない家庭が多数存在しており、新聞に触れる機会が無い生徒が一定数いることが明らかになった。本単元は、学校に新聞が届けられて実践できたが、新聞を購読する家庭が減少している現在、やはり、インターネットを用いて情報を収集せざるを得ない状況になっていることが課題であると感じた。この状況をどのように授業で改善していくかを今後は考えて実践したい。

5 成果と課題

今回の実践の成果としては、新聞に触れる機会を作り、学校で新聞を読んだり、授業や学校生活で生かしたりすることができたことや、今までネット検索が主流だった生徒たちにとって調べ学習や自身の考えを深めるために、新聞という新たな選択肢を増やすことができたことである。また、授業実践において、思考力、判断力、表現力を育成するために新聞を活用することは、とても有効であることが分かった。しかし、課題としては、主体的に新聞を読むという点においては、成果が見られなかったことである。教員が学校生活の中で新聞を手段として活用することは容易にできるが、新聞にあまり触れる機会がない現在の生徒たちにとっては、難しいことかもしれない。やはり、時代の流れではあるが、新聞よりもインターネットやSNSを活用する生徒の割合が高い。信頼性の高い新聞を読むことの良さや役割を伝えていくことが必要であるとともに、休み時間や昼休みに主体的に読む生徒や家庭での購読率の増加が必要だと感じた。これからは新聞のより良い発展に寄与できるように、今後も研究を進めていきたい。

【引用文献】

- (1) 文部科学省（平成30年）、『高等学校学習指導要領解説国語編』，p.165.
- (2) 文部科学省（平成30年）、『高等学校学習指導要領解説公民編』，p.129.

自らの力で、自らの未来を切り拓く生徒の育成

～持続可能なNIEを通して～

愛媛県立伊予高等学校／教諭 山下千枝・河野綾子

1 はじめに（学校紹介）

松山市に隣接する松前町にある全日制普通科高校で、創立42年目である。1・2年生5クラス、3年生4クラスの生徒が在籍している。全国大会出場常連である吹奏楽部やホッケー部が有名である。地域との連携や協働を通して、地域資源を活用した探究型学習を充実させており、地域を支え、未来を切り拓く力を備えた人材育成を目指している。大半の生徒が大学や専門学校に進学するが、公務員や就職者もあり、多様な進路実現を果たしている。令和8年度から理数情報科、芸術科が新たに生まれ、3学科6クラス編成となり、教員養成コースもできる。

2 学校全体としての取組

- (1) **環境整備**：NIE教室は、新聞以外にも「月刊新聞ダイジェスト」、「最新時事用語」、「切抜き速報（教育版、社会版）」、「地域人」等がいつでも閲覧可能であり、小論文や面接、集団討論対策等で特に3年生の利用が多い。「朝日けんさくくん」は50アクセスを契約しており、クラス単位で一斉利用ができる。
- (2) **伊予高NIE TIME**：2022年度から、月1回程度、SHRで実施している。時事問題に触れる機会を増やし、社会への関心を広げ、自分事として物事を深く考えるきっかけにすることをねらいとしている。記事の準備は、各学年の担当教員や3年「時事問題」選択生、探Q「NIE」講座選択生が行う。そのつどファイルして蓄積するので、自己の変容や成長を振り返ることができる。
- (3) **「総合的な探究の時間」(3年間で5単位)**：本校では「探Q活動」と呼び、約20講座の中からそれぞれの興味・関心に応じた講座を選択し、前期（4～9月）は1～3年生が合同で、後期（10月～3月）は1・2年生が合同で活動している。その中の一つ、「NIE」講座は、新聞を起点として情報活用能力、協働力、問題解決能力、発信力を高める取組を行っている。
- (4) **学校設定科目「時事問題(2単位)」**：2年生の約40%、3年生の約75%が選択している。「環境」、「情報・メディア」、「福祉」、「国際」、「科学技術」などの分野における基礎知識を学びながら、新聞を教材化してグループディスカッションやプレゼンテーション、ディベートなどを行い、多角的な視点を獲得し、自己の意見を他者に分かりやすく伝える力を培っている。
- (5) **その他**
 - ・1年生：夏休み課題として「いっしょに読もう！新聞コンクール」に応募した。
 - ・2年生：「文学国語」の授業で、「四国の魅力は？」というテーマで意見を書き、読売新聞「気流」欄NIE投書編に投稿した。4名の意見が掲載された。

- ・探Q「グローバルなまちづくり講座」：愛媛新聞「高校生記者」欄に、自分たちの活動を記事にして寄稿した。

3 実践事例

(1) 探Q「NIE—身近な時事問題学習」講座

「個人研究」と「グループ研究」という二本柱で活動している。

個人研究 新聞スクラップや朝日けんさくくんの活用を通して自分の探究テーマを見つけるところから始まる。社会に目を開き、時事問題に触れる機会になっている。記事をもとにしたディスカッションや講座内発表により、同じテーマに関心を持つ生徒が集まって、新たなプロジェクトにつながることもある。

グループ研究 「記事から社会貢献実践へ」という本校NIEの特色的な活動となっている。課題意識を共有した生徒たちがプロジェクトを立ち上げ、課題解決に向け協働し、その過程と成果を発信することで社会にインパクトを与えるという取組である。

【実践例】

- ①「服のチカラ」プロジェクトは、2021年～2024年まで7期続き、その後は部活動に移行し「伊予高版服プロ」として地域密着型の活動を続けている。
- ②「はだか麦知名度アップ」プロジェクトは、2022年～2024年まで4期続き、その後は独立した講座として、企業、行政、学校（小学校・高校・専門学校・大学）等とコラボして地域貢献型の活動を続けている。
- ③「子ども食堂」プロジェクトは、2024年前期個人研究で課題意識を持った生徒2名を中心に、後期で13名がグループ研究としての活動をスタートさせた。今回は、このグループ研究に焦点を当て、報告する。

◎「子ども食堂プロジェクト」探Q活動計画

目標：新聞記事からの情報とボランティア活動での体験から課題を見つけ、地域に貢献できる活動を企画し、実践する。

10月8日	後期探Qガイダンス、松前町長講演
10月15日	講座決め ※こども食堂についてプレゼン
10月22日	情報収集、共有
10月29日	
11月5日	※お寺マルシェ報告 目標決定、役割分担
11月19日	「こんな子ども食堂がやりたい」プレゼン
11月26日	
12月10日	どんな子ども食堂にするかを決める
12月17日	チラシ作成
1月14日	※ひまわり食堂報告
1月21日	メニュー、レシピ決定、原価計算、仕入れ交渉、他講座に協力依頼、広報など
1月28日	
2月18日	講座内発表会 講座代表決定
3月4日	ステージ発表と展示発表の準備
3月12日	後期探Q発表会
3月26日	出張！大念寺お寺マルシェ@伊予高校

【STEP1 新聞を活用した情報収集】

子どもの貧困や孤立化といった社会問題や、その解決の一助となる「子ども食堂」について理解を深め、課題意識を共有する。

【STEP2 ボランティア活動に参加し、地域から学ぶ】

大念寺のお寺マルシェに参加した際に、「駐車場が狭いから、これ以上多くの人に来ていただくことが難しい」という声を聞いたことが、「いーよ伊予高キッチン」企画のきっかけになった。ひまわり食堂でのボランティア活動では、段取りや衛生面での注意事項、接客上の工夫など、運営に必要な多くの気づきを得た。

【STEP3 企画・日程調整・交渉・広報】

役割分担を行い、メニューは「はだか麦ご飯のカレーライス」と決め、食材の調達はどうするか、どの範囲にどうやって周知するか等、具体的に進めていった。

【STEP4 研究発表 振り返り 試作・本番】

3月12日に行われた松前中・伊予高合同発表会でプレゼン発表。その後、「はだか麦」講座や青少年赤十字部ともコラボし、試作や折紙、塗り絵、トランプ、絵本読み聞かせなどのレクリエーションの準備に取り組んだ。3月26日は50名の参加者を迎え、達成感を味わうとともに、継続的な取組へのモチベーションが高まった。

子ども食堂

どんな食堂にしたいか

誰でも気軽に来られ、「行きたい」と思う子供たちの心の貧困をなくせるような食堂にしたい。



地域で学ぶ

地域食堂にボランティアとして参加。準備、運営の戦力としても頼りにされ充実感！学んだことは採Qで共有。

10月8日大念寺お寺マルシェ



STEP 1 情報をもとに自分の考えをプレゼンする

STEP 2 地域で学び、実践に必要な気づきを共有する

いよこ
いーよ伊予高キッチン
子ども食堂・地域食堂

いつ 3月26日(水)
10:00~13:00
(ごはん10:30~) **50食限定!**

どこで 伊予高等学校
こころせいけいけいりょう
ねだん 高校生以下無料、おとな100円

メニュー ・カレーライス
・はだか麦のおやつ

・のものを持ってきてください。
・西門から入ってください。
えほんやおえかきもあるよ!

【お問い合わせ】
089-984-9311
伊予高校担当 河野

予約・お申込み↑
はこちら

STEP 3 チラシ作成

特産裸麦で地域交流 伊予高生が子ども食堂

カレーやクッキー振る舞う

子ども食堂を運営し、子どもたちと交流する伊予高生ら

（2025年3月31日付 愛媛新聞）

STEP 4 3月26日 伊予高で初の子ども食堂開催(地域交流の場)

(2)「伊予高NIE TIME」と3年「時事問題」のリンク学習

12月のNIE TIMEで、3年生全員に、オーストラリアで16歳未満のSNS利用を禁止する法案が可決されたという記事を探り上げた。提出されたプリントを「時事問題」の授業(37名)で集計・分析し、自分たちの提言という形でプリントにまとめ、全体に還元するという学習を行った。「時事問題」選択生は、賛否拮抗の結果に驚き、同級生の意見や疑問を班で話し合い、自分たちの意見をわかりやすくまとめる工夫をした。教材化されたホットな新聞記事は、思考の交流の場を作る起点になることを実感した。

NIE TIME × 3年「時事問題」

1. 12月17日実施

記事内容「オーストラリアで16歳未満のSNS利用規制法案可決」

2. 記述内容

- ・記事からわかったこと、疑問に思ったこと
- ・法規制に賛成か反対か/その理由
- ・日本ではどうすればいいか

3. 生徒からの疑問

- ・「法規制」以外に有効な解決方法はないのか
- ・この法律は誰のために必要なのか
- ・なぜ16歳で線引きされるのか

「SNSの法規制」
どう思いますか？



アンケート結果の記入欄

1. 賛成・反対の理由を記入してください。

2. その他、ご意見・ご感想を記入してください。



4 実践後の変化と今後の展望

どちらの実践も、新聞記事を切り口に自分と社会の関係性に気付き、そこから自分は社会とどう関わっていくか具体的に考え行動する取組であった。探Q活動で子ども食堂を企画・運営した生徒の感想に、「自分たちが『こんな子ども食堂を作りたい』と思ってから、そのために必要なことを考え、準備し、自分たちが主体となって自分の学校で実現できたことは、自信になった」「地域とのつながりを感じた」とあった。自己と社会とのつながりを知り、高校生の自分が社会貢献できるという気づきと自己有用感を育むことができた。また活動が新聞や他のメディアで発信されることで、ノウハウとともに「志」が引き継がれ、継続的な取組となっているとも感じている。

「時事問題」選択生のアンケート結果によると、実際に新聞に親しんだ生徒は、SNSと比較して新聞の信頼性を強く感じるようになっている。しかし「新聞1か月いくらまでなら購読を考えるか(現在は月額4,000円前後)」という問いに対して、「購読しない」が65%、「購読する」35%のうち平均値は2,360円という結果であった。学校で新聞を読む機会がなければ、新聞と無縁の人生を送る生徒も珍しくなくなるだろう。スマホで完結する現実が生活の全てとなりつつある高校生にとって、学校教育の中でSNSとは質の違う情報源があるということを知ったことは、フィルターバブルやエコーチェンバーの罠から逃れる方法を獲得したということ意義は大きいと考える。

実践活動を通して、持続可能なNIEに必要なものは、「新聞に触れる機会・場を確保すること」と「刺激と楽しさを感じさせ、主体性を引き出すこと」だと感じている。「NIE TIME」とのリンク学習は、HR活動や教科の授業でも可能である。「新聞記事を起点とした交流」が少ない負担でできるため、有効な取組になると考える。町内唯一の高校であり、地元企業との強い連携があるという強みを生かし、「新聞から地域貢献へ」を合言葉に、今後も伊予高版「持続可能なNIE」を継続していきたい。

愛媛県NIE推進協議会委員名簿 (2024年度)

会 長	馬越 吉章	愛媛県小中学校長会 会長 今治市立南中学校 校長	〒 799-1513 今治市松木349-1 TEL 0898-48-2546 FAX 0898-48-6518
委 員	佐々木 進	愛媛県高等学校長協会 会長 愛媛県立松山西中等教育学校 校長	〒 791-8016 松山市久万ノ台1485-4 TEL 089-922-8931 FAX 089-923-3703
委 員	川上 斉睦	愛媛県教育研究協議会 会長 松前町立松前中学校 校長	〒 791-3110 伊予郡松前町大字浜963 TEL 089-984-1149 FAX 089-984-8295
委 員	沖田 浩史	愛媛県高等学校教育研究会 会長 愛媛県立松山東高等学校 校長	〒 790-8521 松山市持田町2丁目2-12 TEL 089-943-0187 FAX 089-934-5766
委 員	中村 道郎	愛媛県私立中学高等学校連合会 会長 愛光中学・高等学校 校長	〒 791-8501 松山市衣山5丁目1610-1 TEL 089-922-8980 FAX 089-926-4033
委 員	中島 康史	愛媛県総合教育センター 所長	〒 791-1136 松山市上野町甲650 TEL 089-963-3111 FAX 089-963-3146
委 員	竹村 京子	愛媛県教育委員会事務局指導部 義務教育課 指導主事	〒 790-8570 松山市一番町4丁目4-2 TEL 089-912-2940 FAX 089-934-8684
委 員	近藤 啓	愛媛県教育委員会事務局指導部 高校教育課 指導主事	〒 790-8570 松山市一番町4丁目4-2 TEL 089-912-2950 FAX 089-912-2949
委 員	加藤 令史	日本新聞協会NIE委員会 委員 愛媛新聞社 代表取締役社長	〒 790-8511 松山市大手町1丁目12-1 TEL 089-935-2121 FAX 089-947-7076
委 員	広島 敦史	朝日新聞社 松山総局長	〒 790-0003 松山市三番町4-9-6 NBF松山日銀前ビル5階 TEL 089-941-0155 FAX 089-941-0125
委員・監査	太田 裕之	毎日新聞社 松山支局長	〒 790-0001 松山市一番町3-3-6 センターポイントビル5階 TEL 089-941-2711 FAX 089-932-4568
委 員	原 典子	読売新聞社 松山支局長	〒 790-0003 松山市三番町4-9-12 松山電算ビル3階 TEL 089-933-4300 FAX 089-933-4302
委 員	前川 康二	産経新聞社 松山支局長	〒 791-8012 松山市姫原3丁目3-36 グランシャトレ姫原601 FAX 089-922-9005
委員・監査	平片 均也	日本経済新聞社 松山支局長	〒 790-0003 松山市三番町4-11-5 TEL 089-941-0349 FAX 089-932-2161
委 員	羽柴 康人	共同通信社 松山支局長	〒 790-0067 松山市大手町1-12-1 TEL 089-941-0128 FAX 089-943-6612
委 員	寺尾 貴之	時事通信社 松山支局長	〒 790-0067 松山市大手町1-11-4 TEL 089-921-6101 FAX 089-921-6102
事務局 長	村上ともこ	愛媛新聞社 地域読者局読者部副部長	〒 790-8511 松山市大手町1丁目12-1 TEL 089-935-2013 FAX 089-946-9015

(2025年2月末時点)

愛媛県NIE推進協議会

〈事務局〉

〒790-8511 愛媛県松山市大手町1-12-1

愛媛新聞社地域読者局読者部内

TEL 089-935-2013 FAX 089-946-9015

https://www.ehime-np.co.jp/online/hiroba/nie_ehime/